

ウマイヤ朝マルワーン家統治時代¹⁾におけるメディナ統治

横内 吾郎

はじめに

メディナは、預言者ムハンマドおよびその後継者である正統カリフたちが居を構えた、イスラームの最初期における政治の中心地であった。しかしながら、カリフ=ウスマーン（在位 23-35/644-656 年）の死後、アリー（在位 35-40/656-661 年）がイラクのクーファに拠点を移すと、続いて成立したウマイヤ朝ではシリアのダマスクスが首都となり、メディナは政治の中心地としての地位を喪失した。こうして一地方都市となったウマイヤ朝時代のメディナは、先行研究において非常に軽視されており、ほとんど無視されている。

先行研究における、このようなウマイヤ朝時代のメディナの軽視については、いくつかの理由を考えることができる。第1の理由は、上述したような政治の中心地としての地位の喪失による、メディナの政治的重要性の低下である。同時代のメディナやメディナが位置するヒジャーズ地方に対し、研究者は「死角 (totter Winkel) となって再び政治活動の中心となることはなかった」[Wellhausen 1902: 124], 「政治的にはほとんど問題とならない」[Crone 1980: 225]²⁾, 「政治的に重要でない」[Blankinship 1994: 74], 「現実の権力の中核からは遠く離れた」[Kennedy 2004: 83] といった評価を下しており、この地域の政治的な価値をほとんど認めていない。第2には、メディナやヒジャーズ地方の軍事的、経済的価値の乏しさが考えられる。正統カリフ時代以来の大征服の過程で、アラビア半島から人口の大

1) ウマイヤ朝 (41-132/661-750 年) は、全 14 代のカリフをウマイヤ家から輩出した世襲王朝であるが、最初の 3 代のカリフと残りの 11 代のカリフはウマイヤ家の中でも異なる家系に属している。最初の 3 代のカリフが属する家系は、初代カリフ=ムアウィヤ 1 世 (在位 41-60/661-680 年) の父アブー・スフヤーン (Abū Sufyān b. Ḥarb b. Umayya) の名に因んでスフヤーン家と呼ばれ、残りの 11 代のカリフが属する家系は、第 4 代カリフ=マルワーン 1 世 (Marwān b. al-Ḥakam b. Abi al-ʿĀṣ b. Umayya, 在位 64-65/684-685 年) の名に因んでマルワーン家と呼ばれる [系図]。マルワーン家の統治時代は、64/684 年から 132/750 年までの約 70 年である。

2) この Crone の評価自体は、アラビア半島の諸州 (Arabian provinces) に対するものであるが、その中にはメディナの評価も含まれている。このことは、Crone がアラビア半島の諸州をこのように評価した次の頁で、スフヤーン家統治時代に地方総督に任命されたカリフの親族や、クライシュ族、アンサールなどの人名を列挙している中で [Crone 1980: 226-227], メディナ総督 (スフヤーン家統治時代のメディナ総督はウマイヤ家で占められている [注 40: 表 2]) を含め、アラビア半島の諸州の総督についてまったく触れていないことから明らかである。

半が移住した結果 [Wellhausen 1902: 34; Humphreys 2006: 112], この地域は十分な人的資源をもたなくなった [Humphreys 2006: 96]。人的資源が乏しいということは、軍事力が乏しいということに近い。一方経済面では、食糧をエジプトなど他の地方からの供給で賄うなど [Shaban 1971: 93, 97; Rotter 1982: 67, 156; Kennedy 2004: 77] 農業生産力の低さが推測され、税金についても、同時代のヒジャーズ地方の税金のデータは存在しないものの、アッバース朝時代のデータ³⁾やその他の事柄⁴⁾から、ほとんど見込めなかったことが推測される⁵⁾。第3には、ウマイヤ朝時代のメディナに関する史料の記述の乏しさが考えられる。現存するムスリムの著作において、ウマイヤ朝時代を対象とした記述は、イラクに関して述べたものが中心的であり [Blankinship 1994: 258-263; Hawting 2000: 40], メディナに関する記述は、上述したようにメディナが政治の中心地ではなくなったこともあって歴史家たちの関心の対象から外れ [Donner 1998: 221]⁶⁾、断片的で、情報量も決して豊富とは言えない。おそらく、先に挙げたふたつの理由のために、ウマイヤ朝時代のメディナは研究者の関心を引きつけることがなく、また最後に理由として挙げた史料的な制約もあって、本稿でも取り扱う第2次内乱(64-73/683-692年)のような、まとまった情報が得られる事件⁷⁾を除いて、先行研究はウマイヤ朝時代のメディナについて、特にその政治的な側面についてほとんど扱うことがなかった⁸⁾。本稿では、以上のように先行研究が軽視してきたウマイヤ朝時

3) アッバース朝時代のヒジャーズ地方の税金額は10万 dinār から30万 dinār であり、約200万 dinār のエジプト、約500万 dinār のジャズィーラ、約1000万 dinār のイラクなど他地方と比較して非常に僅少である [Blankinship 1994: 53, 63-64, 71, 74]。なお、ジャズィーラとイラクの税金額については、dirham の額でデータが示されているため、容易に比較できるように筆者が dinār に換算した (12 dirham=1 dinār [Rotter 1982: 62])。

4) ウマイヤ朝時代のメディナ市民はアターの受給者であり [Kennedy 2001: 77, 92], 受益者たる彼らへの課税がなかった可能性も考慮せねばならない。

5) al-Ya'qūbī (283/897年没) 著『歴史(略号TY)』の、カリフ=ムアウィヤ1世の治世における各地方の ḥarāḡ の額が記録されている部分に、ヒジャーズ地方への言及が見られないことは [TY v. 2: 277-278], 当時のヒジャーズ地方に ḥarāḡ の課税がなかった可能性を示している。

6) このことは、『メディナ史 (*Ta'riḥ al-Madīna al-Munawwara*)』という名称をもつ 'Umar b. Šabba (262/878年没) の作品が、カリフ=ウスマーンの治世までしか扱っていないことに ["'Umar b. Šabba," *ET*]²⁾ 如実に表れている。

7) 後述するように、第2次内乱においてメディナは内乱勃発の直前期に事件の舞台となっており、これらの事件は先行研究でもよく取り扱われている [Wellhausen 1902: 91-98; Lammens 1921: 98-106, 210-257; Kister 1977; Rotter 1982: 35-37, 40-53]。第2次内乱以外では、後にカリフとなるウマル・ブン・アブド・アルアズィーズ(ウマル2世、在位99-101/717-720年)がメディナ総督となったことは、概説書でもしばしば言及されている [Shaban 1971: 117; Hawting 2000: 77; Kennedy 2004: 104]。

8) ウマイヤ朝期のメディナが有していた学問、文芸、遊興の街としての側面については、Abū al-Faraḡ al-Isfahānī (356/967年没) 著『歌謡の書 (*Kitāb al-Aḡānī*)』の描写や、同時代に活動した伝承家や法学者にまつわる情報に基づいて、多少ながらも言及されている [Wellhausen 1902: 34-35, 101; Hitti 1970: 236-239]。一方で、第2次内乱期以外でウマイヤ朝時代のメディナの政治面を扱ったものは、管見の限りでは、S.C. Judd がその博士論文において、ウマイヤ朝末期の帝国全体の司法行政を考察する中で、メディナについて検討、分析した部分が、唯一である⁹⁾

代のメディナの政治的側面を取り扱い、ウマイヤ朝がこの地をどのように支配し、またこの地の支配にどのような意義を見出だしていたのかという問題について、特にマルワーン家統治時代に対象を絞って考察し、同時代のメディナの再評価を試みたい。

I 史料の問題と研究の手法

本論に移る前に、史料に関する問題について言及しておきたい。ウマイヤ朝時代の史料状況について先に簡単に述べたが、そもそも現存するムスリムの著作は、その尽くがウマイヤ朝の滅亡後に収集、編纂されたものであり、ウマイヤ朝時代やそれ以前の時代の研究に利用されているこれらの著作は、同時代史料ではない [森本 1984: 544; Humphreys 1991: 71; Cameron/Conrad 1992: 14-15; Kennedy 2004: 347-348]。これらの著作に残されている、同時代の記録ではない、古い時代から伝わる伝承から歴史を再構築できるのかどうか、預言者ムハンマドや正統カリフの時代を中心に議論が盛んに行われている⁹⁾。一連の議論を経て現在指摘されている、ウマイヤ朝時代を対象としたムスリムの著作の記述が抱える問題は、次のようなものである。すなわち、同時代を対象とした記述には、後世の歴史家の関心に従って、スンナ派のウラマーの立場、あるいはアッバース朝を支持する立場、あるいはシーア派の立場で書かれた記録ばかりが残されている一方で、ウマイヤ朝を支持する立場で書かれた記録はその多くが失われている [Donner 1998: 278-281; Hawting 2000: 15-18; Humphreys 2006: 3-10, 15-18; Borrut/Cobb 2010: 3]¹⁰⁾。現存するこれらの、時にウマイヤ朝に敵対的な偏った記録からは、実際に起きた出来事のあらましを知ることは可能であっても、行動の動機や、出来事、人物に対する評価を論じることは非常に難しい [“Umayyads, 1. the Umayyads in Western scholarship,” *EI*²; Donner 1998: 285-287]。

⁴⁾ [Judd 1997: 156-205]。その他、昨年出版された『新版ケンブリッジ・イスラーム史』第1巻第10章において、メディナを含めて、初期イスラーム時代のヒジャーズ地方が概観されている [Landau-Tasseron 2010: 398-413]。

9) 初期イスラーム史研究に利用できる同時代のムスリムの著作の不在は、19世紀の後半以降、断続的に議論され続けていた問題ではあったが、1970年代後半に J. Wansbrough, P. Crone, M. Cook がこれらのムスリムの著作から初期イスラーム史を再構築することが不可能だと断じ [Wansbrough 1977; Wansbrough 1978; Crone/Cook 1977], 議論が再燃した。一連の史料の問題をめぐる議論については、Humphreys 1991: 69-91; Cameron/Conrad 1992: 13-15; Noth 1994: 1-25; Donner 1998: 1-31; Kennedy 2004: 347-350 を参照されたい。

10) ウマイヤ朝を支持する立場で書かれた記録が失われていく過程については、Donner 1998: 280-281 を参照されたい。親ウマイヤ朝的な記録がかつて存在していたことを示すいくつかの記事が、キリスト教徒が著したシリア語の史料に確認できる。カリフ=アリーの名が省かれているカリフの表（ヒジュラ暦に基づいた年月の表記やアラビア語の語彙の使用が確認されることから、アラビア語から翻訳されたものだと考えられる [Hoyland 1997: 395-396]）などがその例である [Crone 1980: 204]。この表には、アリーを経ずにウスマーンから直接カリフ位を継承したとする、ウマイヤ朝の主張が反映されているものと考えられる [“Uthmāniyya,” *EI*²; Crone 2004: 34]。

こうしたムスリムの著作が抱える問題への認識が広まる中、ウマイヤ朝史研究において、近年では貨幣、碑文、パピルス文書といった同時代史料や、キリスト教徒の著作を、ムスリムの著作と複合的に活用する研究が盛んになってきている¹¹⁾。こうした新たな手法による研究の成果は、ウマイヤ朝の、特にマルワーン家のカリフについて、従来知られていたような信仰やイスラームの問題に無関心な世俗的カリフ [“Umayyads, I. the Umayyads in Western scholarship,” *EP²*; Bonner 2006: 120; Donner 2010b: 187-189]¹²⁾ とは異なるカリフ像を描き出している。例えば、公にキリスト教の教義を批判し¹³⁾、あるいは信仰告白の文言とともにイスラームが他の宗教に優越する旨を述べた『クルアーン』の章句を刻んだ貨幣を流通させて、非ムスリムに対する支配の正当性を訴える¹⁴⁾一方で、自身がムスリムの指導者の地位にあることの正当性を訴えるために神学的な理論を発達させる [Judd 2008; Donner 2010b: 202-203] など、主に支配者としての正当性を維持する手段として、カリフが宗教や信仰の問題にも深く関与していた様子が明らかとなっている¹⁵⁾。このように新たなカリフ像が描き出されているマルワーン家のカリフと彼らが君臨した時代に、筆者は強い

-
- 11) ウマイヤ朝時代に関しては、それ以前の時代と比べて、遥かに多くの貨幣等の同時代史料が利用できるということも [Donner 1986; Hoyland 1997: 687-703; Hawting 2000: 133-134]、こうした手法による研究の進展を後押ししている。これらの同時代史料の中でも、パピルス文書は古くから広く利用されており、Bell 1928; Abbott 1938; Abbott 1965; 森本 1975 といったエジプトの行政や税制に関する優れた研究が発表されている。またムスリムの著作の中でも、詩文や書簡（文書として残っているものではなく、著作物に収録されたもの）、早期に編纂されたハディース集が、古い時代の情報を残している史料として評価が高まっており、その利用が拡大している。
- 12) 従来の研究において、このような世俗的なカリフ像が中心となった大きな要因のひとつとして、ウマイヤ朝の立場で書かれた記録が乏しいために、現存するムスリムの著作にカリフ自身のカリフ観や、宗教、信仰に対する見解がほとんど残されていない [Crone/Hinds 1986: 23, 56-57; Robinson 2005: 87-89; Judd 2008: 441-442] ということも、指摘することができる。
- 13) 77/696年に発行された金貨と銀貨には、キリストが神の子だとする教義を否定する『クルアーン』の「これぞ神にして唯一者、神にして永遠なる者。生まれず、生まれず（112章 1-3節、訳は藤本ほか 2002からの引用、以下の引用も同様）」という章句が刻まれている [Hoyland 1997: 699-700; Donner 2010a: 210]。また、アブド・アルマリク（在位 65-86/685-705年）がエルサレムに建立した岩のドームの内側には、長々とキリスト教の三位一体説を非難する『クルアーン』の章句が刻み込まれている（4章 171-172節、19章 34-36節、長文であるため引用は省略） [Hoyland 1997: 696-699; Robinson 2005: 77-79; Donner 2010a: 213, 233-235]。
- 14) 前掲注 13 で言及した 77 年発行の貨幣には、先に示した章句のほかにも「神のほかには神なく、神は唯一にして、共有する者なし」「ムハンマドは神の使徒である（以上が信仰告白）」「たとえ多神教徒が嫌っても、お導きと真実の宗教とをもたせ、これがあらゆる宗教にまさることを宣言するために使徒を遣わしたもうた（9章 33節）」という文言が刻まれている [Hoyland 1997: 699-700; Donner 2010a: 210]。貨幣のほかにも、マイルストーン、印章、分銅、通行証といった多くの人の目に触れるものに、こういった類の文言が確認できる [Robinson 2005: 113-119]。なお、アブド・アルマリクが貨幣改革を実施する以前には、ビザンツ帝国やササン朝と同様の十字架やゾロアスター教の祭壇の図柄が刻まれた貨幣が発行され、使用されていた [Hawting 2000: 64-65; Robinson 2005: 78-79; 亀谷 2008: 23-26; Donner 2010a: 187, 208-209]。
- 15) そのほかイスラーム法や日常の信仰行為などに関しても、ウマイヤ朝のカリフがその発達に深く関与していたことが指摘されている [Crone/Hinds 1986: 43-57; Donner 2010b: 193-201]。

関心を抱いており、同時代のウマイヤ朝の統治政策やカリフ権の問題を主な研究の課題としている¹⁶⁾。本稿が、ウマイヤ朝の中でも特にこの時代を議論の対象とするのは、こうした筆者の関心のためである。

しかしながら、本稿で議論の対象とするウマイヤ朝マルワーン家統治時代のメディナに関して言えば、貨幣等の同時代史料はほとんど見つかっておらず、キリスト教徒もほとんど記録に残していないため、これらの史料を研究に利用することができない。つまり、ムスリムの著作から得られる情報に依存せざるを得ないのであるが、本稿では、慎重に扱うべきムスリムの著作の情報を有効利用できる研究手法だと考えられている、プロソポグラフィ (prosopography) の手法 [“Umayyads, 1. the Umayyads in Western scholarship,” *EJ²*] を活用して研究を進めることとする。プロソポグラフィとは、ある一定の集団の構成員について出自、経歴などの伝記的情報を収集、整理し、その検討を通じて政治や社会の問題を考察する研究手法の呼称である [Stone 1971: 46; 高橋 1990: 127]。P. Crone が『馬上の奴隷 (*Slaves on horses*)』において主張しているように、ムスリムの著作に記録されている膨大な数の人名のうち、総督の人名などは、パピルス文書などの同時代史料やキリスト教徒の史料で確認できる場合、そのほとんどにおいて両者の情報が一致することから、確度の高い情報であると考えられる [Crone 1980: 16-17, 213-214]¹⁷⁾。Crone はこの著作において、マルワーン家統治時代にイラク総督が登用した人物や、王朝の末期に Qaysiyya と Yamaniyya の名前で現れる二つの集団の構成員について、まず網羅的に人名を収集し、さらに各個人の部族的な背景および職歴を調査して表を作成し [Crone 1980: 130-172]、その表から得られる情報に基づいて同時代のアラブ部族間の対立に関して新たな見解を提示した [Crone 1980: 42-48]¹⁸⁾。本稿では、ウマイヤ朝のメディナ統治を考察する手段として、メディナ総督および、メディナ総督の関与が認められる巡礼の指揮官¹⁹⁾に関する情報を集め、その分析を行う。プロソポグラフィの手法は、メディナのような人事に関する情報以外の記述が乏しい地域の研究にとりわけ有効である。

しかし、いかにムスリムの著作に記録されている総督などの人名が、確度の高い情報と

16) 横内 2005 は、エジプトの総督人事をもとにマルワーン家統治時代の集権化政策について論じたものである

17) A. Noth はムスリムの著作に頻繁にあらわれる、人名を記載した表に関する分析を行っているが [Noth 1994: 96-104]、特に総督の人名を記録した表については、総督という地位が、就任した人物が人々に記憶されていてしかるべき地位であり、その情報を信頼が置けるものだと評価している [Noth 1994: 101-102]。

18) そのほかにも、Crone は、前掲注 2 で示したスフヤーン家統治時代の地方総督や、*ašraf* (貴顕) と呼ばれるアラブ部族の有力者、マルワーン家統治時代のシリアの地方総督、アッバース朝初期のホラーサーン軍とマワーリーなどの人名を収集して、経歴をまとめた表を作成し [Crone 1980: 93-129, 173-200, 226]、スフヤーン家統治時代からアッバース朝時代にいたるまでの政治、軍事の諸問題を考察している [Crone 1980: 29-41, 49-91]。

19) 各年の巡礼を率いる人物。詳しくはIVにおいて説明する。

考えられるとはいえ、メディナ総督や巡礼の指揮官の人名が、同時代史料やキリスト教徒の史料の裏付けを得られないことを考えると、これらの人名に関する情報の信頼性について、個別に検討しておく必要があるだろう。本稿では、これらの人名について、al-Ṭabarī (310/923年没)著『諸使徒と諸王の歴史(略号TRM)』とḤalifa b. Ḥayyāt (240/854年頃没)著『歴史(略号THH)』のふたつの著作に記録されている情報を、主に使用する。現存するムスリムの著作の中で、このふたつの著作が、マルワーン家統治時代のメディナ総督および巡礼の指揮官に関する情報を完全な状態で知ることができる、最も早期の作品だからである²⁰⁾。al-Ṭabarīは、マルワーン家統治時代のメディナに関する情報のほとんどをal-Wāqidi (207/823年没)に依拠しており、メディナ総督の任免の情報も彼が情報源となっている。巡礼の指揮官の情報については、al-Wāqidiに加えてAbū Ma'shar (170/786年没)を主要な情報源としている²¹⁾。Abū Ma'sharの伝える情報は、「この年に某が人々を率いて巡礼を行った (ḥaġġa bi-al-nāsⁱ fi ḥāḍihi al-sanatⁱ fulān^{um})²²⁾」という非常に簡潔なものであり、巡礼を指揮した人物が何者であるか説明されていない場合が多いが、メディナ総督が巡礼の指揮官を務めた際に、その人物がメディナ総督であることを付記している例が少ないながらも確認される [TRM II: 940, 1032, 1191, 1235-1236, 1494-1495, 1917; III: 11]。一方、Ḥalifa b. Ḥayyātはメディナ総督や巡礼の指揮官の人名について、その情報源が誰であるかをほとんど示していないが、Abū al-Yaqzān (190/806年没) および al-Walid b. Hišām b. Qaḥḍam (222/837年没)²³⁾の両名が主要な情報源ではないかと推測される²⁴⁾。そのほか

20) 同時代のメディナ総督全員の人名と、60年間の全ての巡礼の指揮官の人名がTRMとTHHで確認できる、ということである。同時期に書かれたほかの著作では、メディナ総督の全員の人名を追うことはできない。巡礼の指揮官については、TYやMuḥammad b. Ḥabīb (245/860年没)著『美文の書(略号KM)』でも全員の人名を追うことができるが、両者ともTRMやTHHと異なり、その情報源を示していない。そのため本稿では、TYとKMを補助的に使用する。

21) al-WāqidiとAbū Ma'sharはいずれもメディナの歴史家である(またいずれも後にバグダードへ移住している)。Abū Ma'sharはal-Wāqidiの師のひとりであり(両者の経歴については、Sezgin 1967: 291-292, 294-297を参照のこと)、巡礼の指揮官についての情報源のひとりでもあるが [TRM II: 1562]、TRMにおいてこの情報に関してal-Wāqidiから遡る情報源が示されることはほとんどなく、Abū Ma'sharにまで遡る巡礼の指揮官の情報は、バスラの歴史家Aḥmad b. Ṭābit (255/869年没)―無名氏(man ḍakarahu)―Abū Ma'sharの孫Ishāq b. 'Īsā (215/830年没)という、al-Wāqidiを介さない伝承経路で引用されている(例えばTRM II: 873, 940, 1032, 1035など)。

22) 例えば、75年にカリフ=アブド・アルマリクが巡礼の指揮をした際のこと、「この年にアブド・アルマリクが人々を率いて巡礼を行った (ḥaġġa bi-al-nāsⁱ fi ḥāḍihi al-sanatⁱ 'Abdⁱ al-Malikⁱ)」と簡潔に記すのみで [TRM II: 873]、巡礼に関する詳細は全く記されていない。これは、他のカリフが巡礼を行ったときも同様である [TRM II: 1232, 1314, 1482]。

23) バスラの学者 [KT: 229]。祖父のQaḥḍam b. Sulaymānは、al-Walidの主要な情報源であり、ウマイヤ朝末期のイラク総督Yūsuf b. 'Umar al-Ṭaqafiの書記を務めた人物である [THH: 293]。なお、Abū al-YaqzānについてはSezgin 1967: 266-267を参照のこと。

24) この両名と'Abd Allāh b. al-Muġira(この人物の経歴は不明)は、イラク総督が行った人事の情報源としてTHHに名前があらわれる [THH: 159, 209, 239, 247, 255-256, 262, 276, 292-293, 305, 330]。イラク以外の人事の情報源はメディナに限らずほとんど示されていないが、Abū

にも、同時代のメディナの情報を伝えている Wahn b. Ġarīr (207/823 年没) や al-Madā'ini (225/840 年頃没) など²⁵⁾がその候補として考えられるが、いずれにせよ、マルワーン家統治時代のメディナ総督および巡礼の指揮官の人名に関して、al-Wāqidi や Abū Ma'sār が Ḥalifa の主要な情報源となっていないことは間違いない²⁶⁾。このように、al-Ṭabarī と Ḥalifa は同時代のメディナ総督と巡礼の指揮官の人名について、およそヒジュラ暦 2 世紀後半から 3 世紀の初頭にまで遡ることのできる、それぞれに独立した情報源を保持していた。注目すべきことに、al-Ṭabarī と Ḥalifa が伝えるこれらの人名は、ほとんど完全に一致している²⁷⁾。さらに、断片的な情報ではあるが、al-Ṭabarī と Ḥalifa の情報源とはまた異なる、エジプトの al-Layṭ b. Sa'id (175/791 年没) から伝わる情報も、一部の史料に確認することができるが、そこにあらわれる人名もまた al-Ṭabarī と Ḥalifa が伝える人名に一致する²⁸⁾。

al-Yaqzān については、102 年のエジプトとイフリーキヤの人事、122 年の対ビザンツ遠征の司令官の人事と、わずかながらもイラク以外の人事の情報源として名前を確認でき [THH: 254, 279], Abū al-Yaqzān を除く 2 名については、THH: 243 に「これについては合意がなされている (bi-dālika uġmi'a)」と伝えているのが確認できる。これ (dālika) は、直前のワリード 1 世 (在位 86-96/705-715) の人事を指しており、先の Abū al-Yaqzān を含め、彼らがメディナを含む人事の情報全般を伝えていた可能性は低くない。また、巡礼の指揮官の情報についても、Abū al-Yaqzān が 62 年の巡礼の指揮官に言及し [THH: 181], Abū al-Yaqzān と al-Walid b. Hišām が 116 年の巡礼の指揮官についての異説を伝えており [THH: 286], 彼らが Ḥalifa の情報源のひとつであったことは確かである。なお、THH にはアンダルスの学者 Baqī b. Maḥlad (276/889 年没) が収集した Ḥalifa 以外の人物からの情報が混在しており (ただし 58 年から 75 年の部分のみ、現存する THH の唯一の写本は Baqī の手を経たものである [Sezgin 1967: 110]), 人事や巡礼の指揮官の情報も伝えているが、これらの情報は Ḥalifa の情報と区別されなければならない。

25) Wahn b. Ġarīr (バスラの学者 [TK v. 7/2: 51; KT: 227]) はスフヤーン家統治時代のメディナの事件 (63 年のハッラ (al-Ḥarra) の戦いなど) を伝え [THH: 160-164, 177-183], al-Madā'ini (経歴は Sezgin 1967: 314-315 を参照のこと) はハッラの戦いや、王朝末期の Qudayd の戦いについて伝えている [THH: 192, 314-315]。彼らのほかにも、Ḥalifa にウマイヤ朝時代のメディナの情報を直接伝えている伝承者の名は幾人か確認することができる [THH: 164-165, 209, 224, 308, 315-317]。なお、Abū al-Yaqzān もいくつかメディナの情報を伝えている [THH: 181, 224]。

26) Abū Ma'sār は、THH においては預言者ムハンマド死後に生じたリッダなど初期の出来事について、わずかに伝えるのみである [THH: 65, 72, 75, 132]。al-Wāqidi については、Ḥalifa の情報源としては名があらわれず、前掲注 24 において言及した Baqī が伝える独自の情報の部分に、1 度だけ名前があらわれる (Baqī —Muḥammad b. 'Ā'id (233/847 年没, シリアの学者 [Sezgin 1967: 301])—al-Wāqidi) [THH: 175]。

27) 巡礼の指揮官の人名については、そもそもそれぞれの著作において異説が示されている年がある (TRM 88 年と 126 年, THH116 年 [TRM II: 1196-1197, 1875; THH: 286]) もの、両著作間で人名に食い違いが見えるのは、130 年の記事のみである [TRM II: 2017; THH: 317, 328-329]。この相違点に関する問題については、後掲注 67, 注 75 を参照されたい。

28) al-Layṭ b. Sa'id からのメディナ総督および巡礼の指揮官の情報が確認できる史料として、THH (前掲注 24 において言及した、Baqī が収集した情報の部分) と Ibn 'Asākir (571/1176 年没) 著『ダマスカス史 (略号 TMD)』を指摘することができる。後者は 12 世紀の作品であるが、THH に残されている al-Layṭ の伝えるわずかな情報 (スフヤーン家統治時代末期のメディナ総督と巡礼の指揮官の人名 [THH: 171, 174, 180]) とほぼ一致する情報が確認できることから [TMD v. 63: 207], TMD に残されているその他の al-Layṭ からの情報も、(少なくとも Baqī の時代に存在)

以上のように、マルワーン家統治時代のメディナ総督と巡礼の指揮官の人名に関して、ウマイヤ朝が滅亡して数十年とたたないうちに、メディナ、イラク、エジプトと異なる系統の情報同士で一致が見られることは、後世の改竄等を経た情報が等しく広まったためだと考えるよりも、事実がそのままに伝えられているためと考える方が自然であろう。以上の議論により、本稿では al-Tabarī と Halifa の著作に一致してあらわれる、マルワーン家統治時代のメディナ総督および巡礼の指揮官の人名が、事実を反映した正しい情報であると考え、これらの情報に基づいて分析を進めることとする。

II 第2次内乱期のメディナ

本稿は、マルワーン家統治時代の、ウマイヤ朝のメディナ統治を論じるものであるが、同時代の最初の10年は第2次内乱期にあたり、この間メディナはメッカに拠点を置くイブン・アズバイル (‘Abd Allāh b. al-Zubayr) の支配下にあった。第2次内乱は、64/683年にウマイヤ朝第2代カリフ=ヤズィード1世 (在位 60-64/680-683年) とその息子ムアーウィヤ2世 (在位 64/683年) が相次いで死亡したことをきっかけとして勃発し、イブン・アズバイルに与する勢力と、シリアのウマイヤ家の勢力との争いを中心に展開した。ウマイヤ朝がメディナの支配を回復するのは、内乱末期のことである。総督や巡礼の指揮官の分析を行う対象は、ウマイヤ朝が支配を回復して以降の時代であるが、内乱平定後のメディナ統治の理解の助けとするために、第2次内乱期のメディナについても概観しておきたい。

内乱の勃発に先立つこと4年 (60/680年)、ムアーウィヤ1世が死亡し、ヤズィード1世が即位すると、即位の前からヤズィードに対するバイア (bay‘a, 忠誠の誓い) を拒否していたイブン・アズバイル²⁹⁾は、メディナからメッカへと逃亡した [Wellhausen 1902: 91-92; Rotter 1982: 37; Hawting 2000: 46-47]。ヤズィード1世は使者や軍隊を派遣し、イブン・アズバイルからのバイアの獲得に尽力したが、イブン・アズバイルはメッカに籠もってバイアを拒否し続けた。こうした状況のもと、63年に恐らく経済的な動機から [Dixon 1971: 141; Kister 1977] メディナ市民 (ahl al-Madina) が反乱を起こし、メディナ総督とメディナ在住のウマイヤ家一族を襲撃して、彼らをメディナから追放した。この反乱

した情報程度には) 信頼を置いて利用してよいものと考えられる。TMDの al-Layṭ の情報で確認できる。マルワーン家時代のメディナ総督、巡礼の指揮官は表1: 6, 9-13, 10; 表4: 4, 8, 12等である [TMD v. 16: 170; v. 34: 441; v. 36: 296, 372; v. 45: 139; v. 63: 169]。

29) ムアーウィヤ1世が、生前に、ヤズィードをワリー・アルアフド (wali al-‘ahd, カリフ位継承者) とすることについて、各地のムスリムにバイアを求めたが、メディナ在住のクライシュ族の有力者であるイブン・アズバイル、フサイン・ブン・アリー、イブン・ウマルらが、このバイアを拒否し続けていた。イブン・アズバイルとフサイン・ブン・アリーの二人は、ヤズィードの即位後も、彼へのバイアを拒否し続けた [Wellhausen 1902: 88-92; 嶋田 1977: 81-84, 108-110; Rotter 1982: 35-37; Hawting 2000: 46-47]。

に対し、ヤズィード1世はシリア軍をメディナへと派遣し、メディナ郊外のハッラにおいて、シリア軍とメディナ市民との戦いが行われた。戦いはメディナ側の大打に終わり、多くの死者を出すとともに、メディナはシリア軍の略奪行為に晒された [Wellhausen 1902: 92-98; Dixon 1971: 17-18; Kister 1977: 48-49; Rotter 1982: 40-53; 後藤 1988: 147-148; Hawting 2000: 47-48; Kennedy 2004: 89-90]。

その後、ヤズィード1世とムアーウィヤ2世の父子が相次いで死亡し、ウマイヤ朝にカリフの空位状態が生じると、イブン・アズバイルに対するバイアが行われ、シリアの一部を除くほとんどの地域が、イブン・アズバイルの支配を受け入れた。先にメディナを追放されたウマイヤ家一族は、ハッラの戦いの後にメディナに帰還していたが、イブン・アズバイルによって再びメディナから追放された³⁰⁾。しかし、シリアへと向かったウマイヤ家一族は、シリアに残存していたウマイヤ朝を支持する勢力と結びつき、メディナからの移住者の中からマルワーン1世が、次いでその息子のアブド・アルマリクがウマイヤ朝のカリフとなった [Wellhausen 1902: 104-115; Rotter 1982: 133-163; Hawting 2000: 48-49; Robinson 2005: 25-26, 35-36]。ウマイヤ朝は次第に勢力を回復していき、ヒジャーズ地方へも数度にわたって遠征軍を派遣し、メディナ北方の Wādī al-Qurā を拠点として確保した。イブン・アズバイルは、こうしたウマイヤ朝軍のヒジャーズ地方への侵入に対し、しばしばイラク地方のバスラからの援軍に頼っていた。しかし、72/691年にアブド・アルマリクによってイラク征服が果たされ、イブン・アズバイルはイラク地方の軍事力を失った。その後、Wādī al-Qurā に駐屯していた Ṭāriq b. 'Amr がイブン・アズバイル方の総督を追放してメディナを制圧し、ハッジャージュ・ブン・ユースフ (al-Ḥaǧǧāg b. Yūsuf al-Ṭāqafi) がシリア軍を率いてメッカを征服して、イブン・アズバイルを殺害した。この結果ウマイヤ朝は帝国の再統一を果たし、第2次内乱を終結させた [Wellhausen 1902: 118-125; Dixon 1971: 131-142; Rotter 1982: 182-186, 208-243; Hawting 2000: 49]。

以上のように、メディナは内乱が勃発するまでの時期に、事件の中心のひとつとなったが、内乱の勃発後は事件の表舞台から姿を消して、ほとんど話題にのぼることがなくなっている。一連の事件の中で、ウマイヤ朝軍によるハッラでの殺戮およびメディナでの略奪行為は、メディナ市民にウマイヤ朝に対する怨恨を残し [Robinson 2005: 24]、同時期に起きたカルバラでのフサイン殺害や、メッカ攻囲における投石器の使用とカアバ神殿の破壊とともに、後世のムスリムがウマイヤ朝を非難する材料のひとつとなった ["Umayyads, 2. the Umayyads in Muslim tradition," *EP*²; Hawting 2000: 11-12, 48-50]。一方で、メディナ市民によるウマイヤ家一族の追放については、この事件を経験したアブド・アルマリクにメディナ市民に対する敵意を抱かせ、報復的な総督人事や統治を行わせる要因となったとの指摘が

30) ただし、ウスマーンの子孫はウマイヤ家でありながら、追放されずに、第2次内乱中もメディナ (少なくともヒジャーズ地方) にとどまった様子が史料から窺える [AA v. 5: 106, 376]。

なされている [Wellhausen 1902: 134, 140; Dixon 1971: 17; Robinson 2005: 22]。

Ⅲ マルワーン家統治時代のメディナ総督

ウマイヤ朝が支配を回復して以降、メディナには、マルワーン家統治時代を通じて 19 名の総督がカリフによって任命された。47-48 頁の表 1 は、TRM と THH の記録に基づいて同時代のメディナ総督の名を列挙し、各総督の出自などについて調査した情報をまとめたものである³¹⁾。この表からは、まず、ウマイヤ家の成員とカリフの姻戚、すなわちカリフの親族の重用傾向を確認することができる。全 19 名のメディナ総督のうち、11 名がカリフの親族であり [表 1: 3-6, 11-17]、その割合は人数の上では 6 割程度であるが、在職期間では約 60 年の治世のうち 45 年弱と、約 75% を占めている。次に、メディナの出身者³²⁾の重用傾向も指摘することができる。メディナの出身者および父祖が出身者³³⁾であるメディナ総督は、19 名中 13 名 [表 1: 1, 3-6, 8-9, 11-13, 15-17] と約 7 割弱、在職期間では約 60 年中 50 年強と 8 割以上の期間を占めている。また、メディナとの直接の繋がりが確認できない残りの 6 名についても、かつてヒジャーズ地方やその近辺で活動していた部族の出身者ばかりである³⁴⁾。なお、メディナ出身者および父祖が出身者であるメディナ総督は、マウラーである表 1: 1 の Ṭāriq b. 'Amr と、アンサールである表 1: 8 の Abū Bakr b. Muḥammad b. 'Amr b. Ḥazm を除くと、残りの 11 名は皆クライシュ族である [表 1: 3-6,

31) 出自については、人名自体から、その人物の父祖の名や属する部族の名称などの情報を引き出すことができ、さらに Mus'ab al-Zubayrī (236/851 年頃没) 著『クライシュ族の系譜 (略号 NQ)』や al-Balādūrī (279/892 年没) 著『貴顕の系譜 (略号 AA)』といった系譜の書によって、そうした系譜に関する情報を確認することができる。また、個人の姻戚関係についても、これらの系譜の書によってある程度調べることができる。

32) メディナに在住経験のある人物という程度の意味で、出身者という言葉を使用している。表 1: 4-6 の 3 名は、TK にメディナの後継世代 (tabi'ūn) の人物として記録されている [TK v. 5: 112, 181, 232]。表 1: 1 の Ṭāriq については、彼の主人であるウスマーンがメディナで数十年を過ごしたという事実からの類推である。表 1: 8 の Abū Bakr b. Muḥammad b. 'Amr b. Ḥazm は、総督就任以前にメディナでカーディーを務めていた [TRM II: 1191, 1258; THH: 243]。

33) 表 1: 9 の父 al-Ḍahḥāk b. Qays は、シリアに移住した教友であるが [KT: 301; TK v. 7/2: 130-131]、かつてはメディナに居住していた [KT: 29]。表 1: 12 の Ḥalīd b. 'Abd al-Malik b. al-Ḥārīṭ については、祖父の al-Ḥārīṭ b. al-Ḥakam がカリフ=ウスマーンのもとでメディナの市場 (の管理?) を務めた [AA v. 5: 47]。表 1: 11, 13 の 2 名は、メディナ出身者の表 1: 5 [注 32] の息子、表 1: 15 はウスマーンの子孫、表 1: 16, 17 はマルワーン 1 世の子孫である。

34) 表 1: 2, 14 の出身部族である Ṭāqīf 族は、ヒジャーズ地方の都市タイプ of 定住民である。表 1: 7 の出身部族である Murra 族は、メディナ北東のナジュド高原を原住地とする遊牧民であり、ジャーヒリーヤ時代からヒジャーズ地方の都市と深い関係を持っていた。表 1: 10 の出身部族である Naṣr b. Mu'āwiya 族、表 1: 18, 19 の Sa'd b. Bakr 族はいずれも小規模な集団であり、前者はタイプの北東で、後者はメッカの北東で活動する遊牧民であった [Caskel 1966 v. 2: 446, 493, 553; 高野 2008: 38-42; "Murra," *EF*]²⁾。

9, 11-13, 15-17]³⁵⁾。

カリフの親族以外の人物が登用された八つの事例 [表 1: 1-2, 7-10, 18-19] のうち、以下に示す事例については、親族を登用するという全体の傾向から外れている理由を、容易に説明することができる。すなわち、表 1: 1 の Ṭāriq b. 'Amr と 2 のハッジージュ、18 の 'Abd al-Malik b. Muḥammad al-Sa'dī および 19 の Yūsuf b. 'Urwa b. Muḥammad al-Sa'dī の 4 名の事例である。Ṭāriq b. 'Amr とハッジージュは、前述したとおり、第 2 次内乱期にヒジャーズ地方の征服に携わった人物であり、前者はメディナの制圧後に総督として任命され、後者はメッカを征服してメッカ総督となった後に、メディナ総督を兼任することとなった [TRM II: 818, 829-831, 844-852, 854; AA v. 5: 357-374; THH: 206, 226]。'Abd al-Malik b. Muḥammad al-Sa'dī は、イエメンを中心に蜂起し、メディナまで勢力を伸ばしていたハワーリジュ派の 'Abd Allāh b. Yaḥyā Ṭālib al-Ḥaqq と、その門弟である Abū Ḥamza を討伐し、メディナ、メッカ、イエメンの総督となった [TRM II: 2012-2015; AA v. 9: 299-305; THH: 316-317, 328-329]。いずれも征服に携わった司令官が、征服地の総督となった事例であり、これらの人事は、内乱の平定や反乱の鎮圧といった、軍事活動を優先させたものだと考えることができる³⁶⁾。また、Yūsuf b. 'Urwa b. Muḥammad は 'Abd al-Malik b. Muḥammad の甥であり、イエメンにおいて 'Abd al-Malik b. Muḥammad が殺害された後に、メディナ総督に任命されたが、この人事も情勢が不安定な中で行われたものであり、先の事例と同様に、軍事活動を優先させた登用と考えてよいだろう。以上の 4 例については、それぞれの総督としての在職期間が短期で終わっている（最長で 2 年 [表 1: 1-2, 18-19]）ことも、これらの人事が例外的な、一時的な措置であったという印象を強めている³⁷⁾。

35) そのうちの 7 名がウマイヤ家であり [表 1: 3-4, 6, 12, 15-17]、3 名がマフズーム家であり [表 1: 5, 11, 13]、1 名がフィフル家である [表 1: 9]。マフズーム家の 3 名がカリフの姻戚であるため、表 1: 9 の 'Abd al-Raḥmān b. al-Ḍaḥḥāk b. Qays を除く 10 名は、カリフの親族と重複する。彼らの血統については、NQ: 100-114, 159-170, 187-190, 299-329, 447 を参照されたい。

36) なお、これらの軍事遠征の司令官に、ヒジャーズ地方に縁のある人物が登用されたのは、彼らが同地方の地理に精通していることと、現地との縁を軍事活動に利用できることを期待されたものと推測される。実際に、ハッジージュはヒジャーズ地方への遠征に際して、メッカへ直接向かわずに、自身の出身地であるターイフに軍を進め、ターイフをメッカ征服の拠点としている [TRM II: 830; AA v. 5: 357-360]。'Abd al-Malik b. Muḥammad al-Sa'dī については、ヒジャーズ地方との縁だけではなく、かつて兄弟の 'Urwa b. Muḥammad al-Sa'dī がイエメン総督をしていたことも [THH: 247, 251, 259]、この遠征の司令官として任命された大きな要因だと考えられる。

37) 以上の事例のほかにも、もう 1 例、表 1: 7 の 'Uṭmān b. Ḥayyān al-Murri の事例についても、例外と見なせる、登用の理由の説明が可能である。この事例は、メディナ総督人事としては珍しく、史料において登用の理由が説明されている。その説明によれば、カリフ=ワリド 1 世の治世に、ヒジャーズ地方が Ibn al-Aṣ'aṭ の乱 [注 49] の残党やハワーリジュ派の避難先となっており、イラク総督となっていたハッジージュの要求に応じて、メディナでの取り締まりの強化を目的として 'Uṭmān b. Ḥayyān が総督に任命された [TRM II: 1254; TY v. 2: 347]。'Uṭmān b. Ḥayyān は、当時のメッカ総督であった Ḥalīd b. 'Abd Allāh al-Qasri とともに、ヒジャーズ地方に居たイラクからの亡命者を尽くハッジージュのもとに送還して、期待された職務を全うしている

1 カリフの親族の重用傾向について

メディナ総督へのカリフの親族の重用から、どのような政策の意図が読み取れるであろうか。マルワーン家統治時代を通じて同様の傾向が見られるのは、メディナ以外の総督人事では、アルメニアなどビザンツとの国境地帯の地方総督だけであり³⁸⁾、この傾向は、同時代の総督人事において特殊なものと言ってよい。一方、前後の時代に目を向けてみると、ウマイヤ朝のスフヤーン家統治時代とアッバース朝初期のメディナ総督人事においても、同様の傾向を確認することができる。48-49頁の表2および表3は、スフヤーン家統治時代とマフディーの治世（158-169/775-785年）まで³⁹⁾のアッバース朝のメディナ総督について、情報をまとめたものであるが、これらの表からは、細部ではそれぞれに相違が見られるものの⁴⁰⁾、カリフの親族が重用されているという意味においては大きな違いはない。このように、メディナ総督人事におけるカリフの親族の重用傾向は、ウマイヤ朝期から少なくともアッバース朝初期まで、継続して確認することができる。スフヤーン家の統治時代については、メディナ以外の地方においてカリフの親族は重用されておらず [Wellhausen 1902: 86; 嶋田 1977: 78-79; Kennedy 2004: 83]⁴¹⁾、マルワーン家統治時代と同様に、メディナの人事の傾向は特殊なものだと言える。一方、アッバース朝初期においては、カリフの親族の登用はメディナ以外の地域でも広く確認されている現象であり [Crone 1980: 66; Kennedy 2004:

↙ [TRM II: 1258-1261; TY v. 2: 347]。

- 38) マルワーン家統治時代においても、アブド・アルマリクの治世には地方総督に幅広くカリフの親族が重用されていた [Wellhausen 1902: 138-139; Dixon 1971: 114; Shaban 1971: 114-117; 嶋田 1977: 111-112; Crone 1980: 39; Robinson 2005: 45]。この傾向は、次代のワリード1世の総督人事においても継続していることが確認できるが [THH: 239-242]、スライマーンの治世（96-99/715-717年）以降は、王朝が滅亡するまで、メディナやビザンツとの国境地帯（アルメニア、シリアの北方）を除くと、カリフの親族は地方総督に任用されることがほとんどなくなった [THH: 247-248, 251-253, 259-262, 276, 282-286, 291-292, 294-295, 328-330; 横内 2005: 118]。マルワーン家統治時代における、帝国全体でのカリフの親族の登用をめぐる問題については、稿をあらためて議論を行う。
- 39) アッバース朝時代のメディナ総督人事について、TRMはラシードの治世（170-193/786-809年）から在職期間などの細かな記録が見えなくなり、THHはハーディーの治世（169-170/785-786年）からメディナ総督の記録がなくなってしまう（ただし、ハーディー以後でも、マームーンの治世（198-218/813-833年）のみメディナ総督の表が確認できる [THH: 391]）。それまでの時代と異なり、双方の史料を対照させて人事を調査することができなくなるため、表で扱うのはマフディーの治世までとしたい。
- 40) 例えば、スフヤーン家統治時代のメディナ総督は、全員がウマイヤ家の成員である [表2]。また、アッバース朝の最初期（後述するハサン家のムハンマドの反乱以前）のメディナ総督に、ウマイヤ朝下で総督などの役職を経験した人物やその親族が任命されていることは、非常に特徴的である（表3: 2の Ziyād はライの総督とクーファのシュルタ長官 [TRM II: 1470-1471; THH: 283]、表3: 5はその Ziyād の甥、表3: 3と4は、それぞれワリード1世のメッカ総督であった Ḥalīd b. 'Abd Allāh とメディナ総督であった 'Utmān b. Hayyān の息子 [注37]）。
- 41) スフヤーン家統治時代の地方総督については、前掲注2、注18で指摘したように、Crone 1980: 226-227にその人名が列挙されているので（ただし、アラビア半島の諸州は除く）、参照されたい。

127-128, 132, 136], この傾向はメディナの人事に特異なものではない。

しかし、アッバース朝初期のメディナ総督人事においては、表3からも確認できるように、145/762年にメディナで勃発したハサン家のムハンマド⁴²⁾の反乱を境として、その鎮圧後にアッバース家の成員の重用傾向が顕著となっている[表3:6(6), 8, 11-12]⁴³⁾。J. Lassner は、この反乱鎮圧後の人事を「平時でも戦時でも、ḥaramayn (両聖地, メッカとメディナ) はアッバース家の名誉職 (sinecure, あるいは閑職) となった⁴⁴⁾」と評価しており、こうした変化が生じた原因について、ムハンマドの反乱が容易く鎮圧されたことによってメディナやヒジャーズ地方の軍事力の貧弱さが露呈され、ヒジャーズ地方で反乱が生じたとしても脅威とならないと判断されたためだと分析している [Lassner 1980: 77-79]。こうした見方は、ウマイヤ朝期の人事にも当てはめることができる。第1次内乱においては、アリーとタルハ、ズバイルらが、内乱の初期にメディナを抜け出して、イラクのクーファとバスラを拠点として互いに争い [Wellhausen 1902: 32-34; 嶋田 1977: 68; Kennedy 2004: 75-76], 第2次内乱においては、先に指摘したように、イブン・アズバイルがウマイヤ朝軍を撃退する手段として、イラク地方の兵力に依存していた。いずれの事例も、はじめににおいて指摘したような、ヒジャーズ地方の貧弱な軍事力を露呈するに足るものであり、内乱平定後に同地方が王朝の脅威とは認識されず、メディナの総督職が親族のための名誉職とされた、と Lassner と同様の論理で考えることは可能である。

ここで、一度マルワーン家統治時代のカリフの親族の登用事例そのものを、詳しく見てみたい。まず、登用されているウマイヤ家の成員についてであるが、カリフの兄弟や息子の登用事例が見られず、比較的近い例で叔父と従弟 [表1:3, 6] で、残りはそれ以上に遠い血筋の人物ばかりであり、親族の登用といってもあまり血筋の近い人物は登用されていない。これは、実にスフヤーン家時代やアッバース朝初期の登用事例においても、同じように確認できる傾向である [表2:表3]。しかしながら、カリフの親族が広く登用されていたマルワーン家統治時代の前半 [注38] においては、メディナ以外でのカリフの兄弟や息子の登用事例はしばしば確認され⁴⁵⁾、帝国全体での親族の登用が見られなくなった同時代の後

42) Muḥammad b. 'Abd Allāh b. al-Ḥasan b. al-Ḥasan b. 'Alī. ハサンの曾孫であり、純粹の魂 (al-Nafs al-Zakiyya) の異名をもつ。アッバース朝の支配に対し身を潜めていたが、マンスール (在位 136-158/754-775 年) によるアリー家への弾圧が強まる中、145/762年にメディナで反乱を起こした [嶋田 1977: 148; Kennedy 2004: 130-131; 菊地 2009: 92-93]。

43) マフディーの死後についても、TRM と THH に別々に記録されている情報から、少なくともラシードの治世に4名、アミーンの治世 (193-198/809-813 年) に1名、マームーンの治世に3名のアッバース家の成員の登用が認められ [TRM III: 739, 860; THH: 391], 同様の傾向が継続していたことが確認できる。

44) メッカ総督人事においても、ムハンマドの反乱の鎮圧後、メディナと同程度のアッバース家の成員の重用傾向が確認できる [THH: 349, 358, 364, 377-378, 391]。

45) 例えばアブド・アルマリクは、兄弟の 'Abd al-'Aziz, Biṣr, Muḥammad をそれぞれエジプト、イラク、ジャズィーラに、息子のスライマーン、'Abd Allāh をそれぞれパレスティナ、ヒムスにメ

半においても、ビザンツとの国境地帯の地方総督にカリフの兄弟や息子の登用が確認できる⁴⁶⁾。こうした意味においても、メディナの人事は特徴的であると言えるが、このように、よりカリフに近い兄弟や息子が任命されないメディナ総督という役職は、比較的不重要でない、閑職、名誉職と呼んで問題がない役職であるように思われる⁴⁷⁾。

2 地縁を有する人物の重用傾向について

続いて、マルワーン家統治時代のメディナ総督人事に見られる、メディナの出身者の重用という、もう一つの特徴について検討してみたい。任地の出身者であるという、任地において地縁を有する人物の重用傾向についても、マルワーン家統治時代において、メディナ以外の人事ではエジプトに一時期確認できるほかは、ほとんど確認することができない。例えば、ヒジャーズ地方同様に、第2次内乱期に反ウマイヤ朝勢力の一大拠点となったイラクでは、マルワーン家統治時代に任命された総督の大半はイラクの出身者ではなく、シリアから派遣された人物であった⁴⁸⁾。このことは、スフヤーン家統治時代のイラク地方の総督が、イラクへの移住者である al-Muġira b. Šu'ba al-Taqaḫī や Ziyād b. Abī Sufyān とその息子 'Ubayd Allāh [TK v. 6: 12; v. 7/1: 70-71; KT: 183, 191], バスラでの総督経験を持つ 'Abd Allāh b. 'Āmir b. Kurayz [TRM I: 2828; THH: 133] らによって占められていた [Wellhausen 1902: 71-82; Shaban 1971: 84-88] ことと大分趣を異にする。マルワーン家統治時代のイラクにおいては、第2次内乱の平定後もハワーリジュ派の反乱や Ibn al-Aṣ'at 反乱⁴⁹⁾など、ウマイヤ朝に対する反乱が続発したこともあり、反乱の鎮圧にシリア軍が投入され、シリア軍の駐屯地としてワースイトが建設されるなど、シリア (=ウマイヤ朝) による支配の強化を印象づける政策が展開された [Wellhausen 1902: 143-156; 高野 1996: 14-19; Kennedy 2001:

任命している [THH: 209, 231]。続くワリード1世は、兄弟のスライマーン、'Abd Allāh, Maslama をそれぞれパレスティナ、エジプト、ジャズィーラに、息子の 'Abd al-'Aziz, al-'Abbās, 'Umar をそれぞれダマスカス、ヒムス、ヨルダンに任命している [THH: 235, 242]。

46) ヒシャームはアルメニアに兄弟の Maslama を任じ、ヒムスに息子の Sa'id を任じている [THH: 260; AA v. 8: 406]。ヤズィード3世はキンナスリーンに兄弟の Biṣr, al-Masrūr を任じている [TRM II: 1834, 1876]。マルワーン2世はジャズィーラに息子の 'Abd Allāh を任じている [TRM II: 1939]。

47) その他、マルワーン家の統治時代のメディナ総督は、前後の時代よりも姻戚の登用事例が目につくが、その中でもヒシャームの治世とワリード2世の治世において、母方の叔父 (ḥāl) の登用という特徴が見られることも指摘しておく [表1: 11, 13-14]。

48) イラクの出身者でイラク総督となったのは、スライマーンの治世の Yazīd b. al-Muḥallab b. Abī Sufra (Azd 族、バスラ出身、祖父の代にバスラへ移住 [TK v. 7/1: 72]) のみ [TRM II: 1282; THH: 247]。イラク全域の総督が置かれなかった時期 [TRM II: 816, 818, 1346; THH: 227, 251] を含めても、第2次内乱平定直後にバスラ総督となった Ḥalīd b. 'Abd Allāh b. Ḥalīd b. Asīd (彼の出自については Rotter 1982: 112-113 を参照せよ) の事例が加わるのみである。

49) アブド・アルマリクの治世の末期に、スイジスターン地方の征服に向かったクーファ出身の武將 Ibn al-Aṣ'at が、イラク総督ハッジャージュおよびアブド・アルマリクに対して起こした反乱。この反乱については、稲葉 1995: 107-109; 高野 1996: 15-17; 松本 2009 を参照されたい。

30-42]。上述したように、イラクの総督として、イラクにおいて地縁を有する人物ではなく、シリアの出身者が派遣されたことも、支配の強化の一環ととらえることができる。このようなイラクに対する支配のあり方は、メディナに対するそれとは大きく隔たっている。IIにおいて、第2次内乱の直前に生じたメディナ市民によるウマイヤ家一族の追放が、その後の報復的な人事や統治の要因となったとの指摘があることを紹介したが、メディナには、イラクに見られるような、ウマイヤ朝による支配の強化、厳格化を具体的に示す事例は確認することができない⁵⁰⁾。こうした支配のあり方の違いは、人口も多く、反乱の続発によって王朝に脅威を与え続けたイラクと、王朝に脅威と認識されなかったメディナという、両地域の情勢の相違に起因するものと考えられる。こうした支配のあり方の相違が見られる中で、地縁を有する人物が重用されたメディナ総督人事は、イラクと比較すれば、報復的と言うよりも、むしろ融和的な人事であったと言えるのではなからうか。

一方、エジプトの人事については、スライマーンからワリード2世までの治世に、数名のエジプト在住者のエジプト総督としての登用事例を確認することができる⁵¹⁾。当時のエジプトは、西方征服の進展により征服拠点としての機能を失っており、後背地として租税の徴収に重点が置かれていた [横内 2005 : 114-124]。メディナとエジプトは、地縁を有する人物が重用されているという点ばかりでなく、軍事的に重要性が低いという点でも共通している。しかしながら、一方で、同時代のエジプト総督人事においては、次のような特有の現象が確認される。すなわち、前任者が死亡するか、異動となって総督職を離れた際に、前任者が自らの代理として残した (istahlafa) 人物を、カリフがその地位を追認して (aqarra) そのまま総督とするという人事である [横内 2005 : 122, 126]。こうした場合において、通常は前任者が残した代理に代えて、あらたに別の人物が総督として任命される。メディナの人事においても、エジプト以外の地方と同様に、こうした事例はほとんど見られない⁵²⁾。

50) 報復的な統治の事例として具体的に指摘できるものは、メディナ市民が総督によって不当な扱いを受けたという類のものである。例えば、教友を含むメディナ市民が過去の罪を追及されて、ズインミー (異教徒) の庇護の印のように鉛の印の装着を強制された [TRM II : 854-855 ; AA v. 5 : 373] というものや、高名な学者が過度の処罰を受けた [TRM II : 1169-1171 ; AA v. 4/2 : 567-569] といったものである。

51) Fahm 族が3名、Dū Aṣḥāḥ 族 (Himyar 族の下位集団) と Ḥadramawt 族が1名 [横内 2005 : 118]、以上5名の所属する部族 (氏族) については、森本 1976 : 93-96 の「エジプト在住アラブ氏族名簿」にその名が確認できる。Dū Aṣḥāḥ 族の Ayyūb b. Ṣurāḥbil については、WQ : 67 に Ahl Miṣr であることが明記されている。Fahm 族の3名については、総督となった 'Abd al-Malik と 'Abd al-Rahmān ('Abd al-Malik の従兄弟の子) および 'Abd al-Malik の叔父と、3世代にわたってエジプトのシュルタ長官を務めた家系の出身である [WQ : 60, 64, 76]。Ḥadramawt 族の Ḥafs b. al-Walid も、総督就任以前にシュルタ長官を務めた経験を持つ人物である [WQ : 72-73]。

52) メディナ総督人事において、前任者が代理として残した人物の地位をカリフが追認した唯一の事例は、表1 : 3の Yahyā b. al-Ḥakam がシリアのアブド・アルマリクのもとを訪ねた際に、総督代理とした Abān b. 'Utmān b. 'Affān をそのままメディナ総督として追認した事例である [THH : 226]。しかし、Ibn Sa'd (230/845年没) 著『大伝記集 (略号 TK)』の記事によれば、この事例は、アブド・アルマリクが Yahyā から Abān を代理としたことを確かめると、Yahyā を罷免して、Abān に正式な任命書 ('ahd) を送付している [TK v. 5 : 112-113]。これは、前任者をわざわざ

以上、マルワーン家統治時代のメディナ総督人事において確認された、カリフの親族の重用と地縁を有する人物の重用というふたつの特徴について、異なる時代あるいは地域の総督人事との比較をしながら、分析を進めてきた。おそらく、人口の乏しいメディナは、イラクと異なり王朝の軍事的な脅威とならなかったために、一方では地縁を有するメディナの出身者が登用される比較的融和的な人事が行われ、一方では名誉職、閑職としてカリフの親族にあてがわれた。しかしながら、血統的にカリフに近しくない親族、姻戚が登用され、比較的重要な役職と考えられるとはいえ、エジプトのように総督の人選が前任者に委ねられるようなことがなく、また血筋が近しくないとはいえ親族の登用が継続されている点に、メディナ総督に何の意味ももたされていないということも考えがたい。そこで、更なる考察の材料として次章では巡礼の指揮官について分析を進めていきたい。

IV 巡礼の指揮官

TRM や THH など初期イスラーム時代の年代記には、各年の巡礼を率いた (ḥaġġa bi-al-nās¹) 人物の名が記録されている。本稿では、こうした人物を表すために「巡礼の指揮官」という語を便宜的に使用しているが、これに該当する用語が史料上に見られるわけではない。大抵の場合、史料には I において示したように、ある人物が人々を率いて巡礼をおこなったという簡潔な記録が残されているだけで、彼らが巡礼を率いる様子についての詳細は明らかでないが、TY や TK が記録している 75 年のアブド・アルマリクが率いた巡礼の記事から、指揮官が巡礼中の礼拝を取り仕切り、説教を行っていたことは窺い知れる [TY v. 2: 326-327; TK v. 5: 171-173]。49-51 頁の表 4 は、マルワーン家統治時代の巡礼の指揮官に関する情報をまとめたものである。この表から、巡礼の指揮官が、原則的には、メディナ総督から選ばれていたとすることができる。同時代に巡礼の指揮官を務めた人数は都合 27 名であり、そのうちメディナ総督は 14 名 [表 4: 1, 3, 6-7, 11, 13-15, 18-19, 23-25, 27] と人数では割合が半分程度でしかない。しかしながら、メディナ総督以外の人物は、巡礼の指揮官を務めることが基本的に 1 回限りである [表 4: 2, 8-10, 12, 16-17, 20-22, 26]⁵³⁾ のに対し、メディナ総督は在職中に何度も巡礼の指揮を行っているため、実際に巡礼が行われた年の数では、全 60 年のうち 42 年と丁度 7 割がメディナ総督によって執り行われた巡礼となる。また 51-52 頁の表 5 および表 6 では、ムハンマドの時代からウマイヤ朝のスフヤーン家統治時代までの巡礼の指揮官がまとめられているが、これらの表からは、巡礼の指揮は、正統カリフ時代（あるいはムハンマドの別離の巡礼）以来、原則的にメディナの

¹ 罷免して ('azala) Abān を後任としている点で、(異動や死亡によって) 離職した前任者が残した代理の地位を追認するというエジプトの事例と大きく異なる。

53) カリフに即位する以前と、即位後にそれぞれ一度ずつ巡礼を指揮した、ワリード 1 世とスライマーンのみ 2 度巡礼を指揮している [表 4: 4-5]。

統治者がその任に当たってきた職務であったことが確認できる。正統カリフ時代については、カリフがメディナを離れた第1次内乱の勃発までは、24回中21回をカリフ自身が巡礼を指揮しており、スフヤーン家時代についても、マルワーン家統治時代同様にイレギュラーの要素は見られるものの、22回中14回と64%がメディナ総督による巡礼である。以上のことから、マルワーン家統治時代に見られるメディナ総督が巡礼を指揮するという原則は、正統カリフ時代以来の伝統に則ったものだと結論づけられる。

続いて、初期のアッバース朝の事例との比較をしてみたい。53-54頁の表7は、表3同様にマフディーの治世までの巡礼の指揮官の情報をまとめたものである。この表を一覧してまず気がつくことは、メディナ総督が巡礼を指揮するという原則が崩壊していることである。この40年ほどの期間に、メディナ総督が巡礼の指揮官を務めたのはわずか5回〔表7:1-2, 14, 16〕⁵⁴⁾しかない。一方で、巡礼の指揮官を務める人物は、この40年ほどの期間に限っては、全事例がアッバース家の親族である〔表7〕。さらに、姻戚が指揮官を務めた2例〔表7:2, 17〕を除くと、残りの全ての事例がアッバース家の成員（アッバースの子孫）である。また、特徴的な現象として、カリフ自身による巡礼の増加を指摘することができる。マンスールは自ら5回の巡礼を指揮しており、マフディー死後の事例となるが、ラシードについてはさらに多く9回の巡礼を指揮している〔TRM III: 605, 609-610, 612, 629, 638, 646, 651, 701; THH: 366-375〕。マルワーン家のカリフのうち、治世が10年以上にわたるアブド・アルマリク、ワリード1世、ヒシャームのいずれもが、カリフとして1度しか巡礼を行っていない〔表4:2, 4, 16〕ことと比較すると、大きく様相が異なっている。

次に、マルワーン家統治時代に見られる3割の例外、すなわちメディナ総督以外が巡礼を率いた事例について詳しく見ていきたい。これらの事例は、いくつかのパターンに分類することができる。一つめは、カリフ自身が巡礼を率いた事例である〔表4:2, 4-5, 16〕。二つめは、1例のみであるが、ワリー・アルアフドが巡礼を率いた事例である〔表4:20〕。三つめは、その他のカリフの王子が巡礼を率いた事例である。これはさらに、2種類に分類できる。一方は、カリフがワリー・アルアフドにしようと画策した王子であり〔表4:4-5, 8, 21〕⁵⁵⁾、もう一方は巡礼の翌年にビザンツ方面への遠征の司令官を務めた王子である〔表4:4, 8-10, 17, 21〕⁵⁶⁾。そのほか、メッカ総督が巡礼を率いた事例も存在する〔表4:1, 12, 19,

54) 紙幅の都合上、マフディーの治世までしか表では扱っていないが、それ以降の事例も史料で追うことができる。しかしながら、50年先のマームーン治世まで見ても、メディナ総督が巡礼を指揮した例は数回確認できるのみである〔TRM III: 832, 1039, 1044, 1062, 1111; THH: 382-391〕。

55) 当時のカリフ（アブド・アルマリク、ワリード1世、ヒシャーム）が、すでにワリー・アルアフドが存在している中で、自らの息子〔表4:4, 5, 8, 21〕をワリー・アルアフドにしようと画策したことについては、TRM II: 1164-1168, 1274-1275, 1741-1750を参照されたい。おそらく、巡礼の指揮をさせることで、ワリー・アルアフドを交替させることについての支持を集めようと図ったのであろう。

56) それぞれ、巡礼の翌年にビザンツ帝国領あるいはアルメニアへの遠征を行っている（表4:4, 8, 10, 17, 21はビザンツ領に、9のMaslama b. 'Abd al-Malikはアルメニアへ遠征している）

26]。

マルワーン家のカリフは巡礼についてどのような意義を見出だして、以上のような人々に巡礼を率いさせたのであろうか。おそらく、カリフは巡礼に、全ムスリムに対して支配者が誰であるかを再確認させるデモンストレーションの場としての意味を見出だしていたものと推測される。地方単位では、毎週地方総督が指導する集団礼拝が支配者の確認の場となった [Robinson 2005: 106-109] のに対し、巡礼は、年に一度巡礼に参列する全地方のムスリムに対して、カリフや王子やメディナ総督が彼らを率いて巡礼をすることで、支配者が誰であるかを確認させる機会となった。前述したように、アッバース朝代には、カリフ自らがたびたび巡礼を指揮するようになり、カリフ自身が巡礼を行わない年であっても、巡礼にアッバース家の成員を毎年のように派遣するようになったことから、こうした巡礼のデモンストレーションの場としての活用というのは、十分にありうる。また、おそらくそうした王朝の支配を実感させる手段として、カリフやマルワーン家の王子は軍隊を伴ってシリアから巡礼に訪れていた。カリフが巡礼にシリア軍を伴っていたことを示す記事はいくつか確認することができる [TK v. 5: 172; TRM II: 1233-1234, 1338]。またマルワーン家の王子についても、前段落で示したように巡礼の指揮に訪れた翌年にビザンツ帝国領やアルメニアへの遠征を行っている事例がしばしば確認でき、翌年の遠征に連れて行く軍隊を巡礼に引き連れていた可能性は低くない。このことは、巡礼と異教徒との聖戦という、ふたつの宗教的義務を連続的に実践することで、王朝のイスラームを護持する者としての側面をアピールする⁵⁷⁾意図もあったものと考えられる。

ところで、スフヤーン家時代には巡礼の指揮官がウマイヤ家の成員で占められ [表 6]、アッバース朝前期においても概ねアッバース家の成員で占められているのとは異なり、マルワーン家統治時代においては、ウマイヤ家ではない姻戚や親族ですらない人物が指揮を務める事例がいくつも確認できる [表 4: 1, 6, 11, 13-15, 19, 23, 26-27]。これは、マルワーン家統治時代までは維持されていた、メディナ総督が巡礼の指揮官となるという原則に起因するものである。スフヤーン家統治時代には、メディナ総督が全員ウマイヤ家の成員であり [表 2]、原則どおりでも巡礼の指揮官を務めるのはウマイヤ家の成員となった。アッバース朝のカリフはその原則にとらわれることをやめ、メディナ総督にアッバース家以外の人物になった時も、アッバース家の成員を巡礼の指揮官として別に派遣した [表 3: 2-5, 7, 9-10; 表 7]。しかし、このふたつの時代の間にあるマルワーン家統治時代は、第2次内乱期にウマイヤ家の成員の大部分がメディナを離れたことにより、メディナ総督にウマイヤ家の成員を登用することがおそらく手軽な選択肢ではなくなったために、ウマイヤ家の成員以外の人物も登用されるようになった。しかしメディナ総督が巡礼を指揮する原則は維持され

⁵⁷⁾ [THH: 214, 238, 244, 271, 275]。)

57) 聖戦(ジハード)の実践を、王朝の正当性と結びつける考え方については Blankinship 1994: 78-79; Bonner 2006: 121-124 を参照されたい。

ており、特にシリアからカリフや王子が訪れない年には、彼らが巡礼を指揮した。こうした状況下でカリフの姻戚がしばしばメディナ総督に登用されたのは、彼らにもウマイヤ家の成員の代わりに、王朝の代表者として巡礼を指揮することが期待されたためであろう。巡礼の指揮官が王朝の代表者としての側面をもったことは、ウマイヤ家の成員でも姻戚でもない 'Utmān b. Hayyān と Abū Bakr b. Ḥazm がメディナ総督であった時代に、彼らに巡礼の指揮をさせず、わざわざマルワーン家の王子やウマイヤ家の成員であったメッカ総督に巡礼の指揮官を務めさせ [表4: 5, 8-10, 12], 指揮官をウマイヤ家の成員にする努力がなされていたことが窺える⁵⁸⁾点からも推測することができる。

おわりに

本稿は、先行研究において軽視されてきた、ウマイヤ朝のマルワーン家統治時代のメディナについて、ウマイヤ朝による支配のあり方や、同地の支配に王朝がどのような意義を見出だしていたかを探るべく議論を進めてきた。初期イスラーム史研究において、ムスリムの著作の利用は問題をはらんでいるものの、メディナは、貨幣等の同時代史料やキリスト教徒の史料が利用できないため、後世のムスリムの著作を有効利用すべくプロソポグラフィの手法を用い、メディナ総督および巡礼の指揮官の情報を精査することで、先に示した目的に到達することを目指した。その結果、まずマルワーン家統治時代のメディナ総督には、カリフの親族と、メディナに地縁を有するメディナの出身者が重用されていたことが判明した。またメディナ総督に任命されたカリフの親族は、カリフの息子や兄弟といった近い人物ではなく、しばしば姻戚も登用されていた。メディナ、あるいはメディナの位置するヒジャーズ地方は、度々内乱や反乱の舞台となったものの、同じく反乱の温床となったイラクと比べて人口に乏しく、おそらく、そのために王朝に軍事的な脅威と認識されず、王朝による圧力は比較的穏やかなものとなり、地縁をもつ人物の重用という融和的な人事が行われ、また名誉職、閑職としてこの地の総督職は血筋の遠い親族にあてがわれた。一方、マルワーン家統治時代のメディナ総督はムハンマドの時代以来の伝統に則り、毎年行われている巡礼の指揮官の役割を担っていた。マルワーン家のカリフにとって巡礼は、おそらく巡礼に参列する全ムスリムに対して支配者が誰であるかを知らしめるデモンストレーションの場としての意味ももっていた。時に、シリアからカリフやその王子たちが軍隊を率いて巡礼を行い、参列者に威厳を振りまいた。メディナ総督は、単なる閑職だったのではなく、通常時に巡礼を指揮する王朝の代表者としての役割が期待されたために、カリフの親族が重用されたのである。

[本稿は京都大学に提出した博士論文（2010年度）の第2章を加筆訂正したものである。]

58) こうした努力は、ウマル2世およびヤズィード2世の治世には見られないが [表4: 11, 13-14], これらの事例の意味する所を十分に説明することができない。今後の検討課題としたい。

表1 マルワーン家統治時代のメディナ総督

| 人名 | 在職期間 ⁵⁹⁾ | 備考 ⁶⁰⁾ | 典拠 |
|--|---------------------|---|------------------------------|
| アブド・アルマリクの治世 | | | |
| 1 Ṭāriq b. 'Amr | 73-74 年 | 'Uṭmān のマウラー 出身 | TRM II : 852 ; THH : 226 |
| 2 al-Ḥaġġāġ b. Yūsuf al-Ṭāqaḥī | 74-75 年 | (後に姻戚 ⁶¹⁾) ※ | TRM II : 854 ; THH : 226 |
| 3 Yaḥyā b. al-Ḥakam b. Abī al-'Āṣ | 75-76 年 | U : 叔父 出身 | TRM II : 863 ; THH : 226 |
| 4 Abān b. 'Uṭmān b. 'Affān | 76-83 年 | U : はとこ、姻戚 : 妃 ⁶²⁾ の叔父/出身 | TRM II : 940 ; THH : 226 |
| 5 Ḥiṣām b. Ismā'īl al-Maḥzūmī | 83-87 年 | 姻戚 : 妃 ⁶³⁾ の父 出身 | TRM II : 1127 ; THH : 226 |
| ワリード1世の治世 | | | |
| 6 'Umar b. 'Abd al-'Azīz b. Marwān | 87-93 年 | U : 従弟、姻戚 : 妃 ⁶⁴⁾ の兄弟/出身 | TRM II : 1182 ; THH : 241 |
| 7 'Uṭmān b. Ḥayyān al-Murrī | 93-96 年 | | TRM II : 1254 ; THH : 241 |
| スライマーン、ウマル2世の治世 | | | |
| 8 Abū Bakr b. Muḥammad b. 'Amr b. Ḥazm al-Anṣārī | 96-101 年 | 出身 | TRM II : 1282 ; THH : 247 |
| ヤズィード2世の治世 | | | |

59) メディナ総督の在職期間について、TRM と THH の情報はほぼ一致しているが、一年程度のずれは時折確認される。しかし、本章での議論に影響を及ぼすほどの違いはないため、表には TRM に記録されている就任、解任の年を採用し、THH との相違は一々指摘しない。

60) 備考欄の上段は、カリフと総督との関係を表している。表中の U はウマイヤ家の成員であることを示す [系図]。下段は総督がメディナの出身者であるか、あるいはその父祖がメディナの出身であったかを示している。また下段の※印は、その人物がメッカとターイフの総督を兼任していたことを示す (そのうち表 1 : 9 の人物は、メッカ総督のみ兼任)。表 2、表 3 の備考欄についてもこの表と同様である。

61) ハッジャージュは、姪をアブド・アルマリクの息子の Yazīd (後のカリフ=ヤズィード2世) に嫁がせ [NQ : 167 ; TRM II : 1359]、また、自らの娘をワリード1世の息子 al-Masrūr に嫁がせて [AA v. 8 : 67]、カリフとの姻戚関係を結んでいる。しかし、彼がメディナ総督となった74年の時点では、Yazīd はまだ10歳にも達しておらず、生年が定かではない al-Masrūr についても、父のワリードがこの時点で20代前半であり、仮に生まれていたとしても、成年に達していないことは明らかである。よってこの姻戚関係は、al-Ḥaġġāġ がメディナ総督を退任し、イラク総督に就任した後に作られたものと考えられる。

62) Umm Ayyūb bt. 'Amr b. 'Uṭmān b. 'Affān [NQ : 164 ; AA v. 4/2 : 473 ; TRM II : 1174]。この女性との婚姻については、Abān b. 'Uṭmān の総督就任以前であるかは不明であるが、マルワーンの家からウスマーンの一族との間には緊密な婚姻関係が結ばれており [NQ : 160-161, 170 ; 後藤 1988 : 173-174]、この婚姻がメディナ時代に行われた可能性は否定できない。

63) Umm Ḥiṣām bt. Ḥiṣām b. Ismā'īl [NQ : 164 ; AA v. 4/2 : 473 ; TRM II : 1174]。カリフ = ヒシャームの母 [AA v. 8 : 367 ; TRM II : 1466 ; TY v. 2 : 378-379]。ヒシャームの生年は72年であるため、この女性との結婚は Ḥiṣām b. Ismā'īl のメディナ総督就任以前のことである。

64) Umm al-Banīn bt. 'Abd al-'Azīz b. Marwān [NQ : 165 ; AA v. 8 : 65]。カリフ = ワリードの王子である 'Abd al-'Azīz の母であり、彼がワリード1世の治世に地方総督や遠征の司令官、巡礼の指揮官をしており [TRM II : 1217, 1256 ; THH : 238, 242 ; AA v. 8 : 71 ; 表 4 : 8]、その生年は70年代以前と推測できることから、この女性との結婚はウマルのメディナ総督就任以前のことである。

| | | | | |
|--------------|--|--------------------------|------------------------------------|---------------------------|
| 9 | 'Abd al-Raḥmān b. al-Ḍaḥḥāk b. Qays al-Fihri | 101-104 年 | 父祖が出身/※ | TRM II: 1372; THH: 259 |
| 10 | 'Abd al-Wāḥid b. 'Abd Allāh al-Naṣri | 104-106 年 | ※ | TRM II: 1449; THH: 259 |
| ヒシャームの治世 | | | | |
| 11 | Ibrāhīm b. Hišām b. Ismā'il al-Maḥzūmī | 106-114 年 | 姻戚：母 ⁶⁵⁾ の兄弟 父祖が出身/※ | TRM II: 1471; THH: 287 |
| 12 | Ḥalīd b. 'Abd al-Malik b. al-Ḥarīṭ b. al-Ḥakam | 114-118 年 | U：はとこ 父祖が出身 | TRM II: 1561; THH: 282 |
| 13 | Muḥammad b. Hišām b. Ismā'il al-Maḥzūmī | 118-125 年 | 姻戚：母の兄弟 父祖が出身/※ | TRM II: 1592; THH: 283 |
| ワリード 2 世の治世 | | | | |
| 14 | Yūsuf b. Muḥammad b. Yūsuf al-Ṭaqaḥī | 125-126 年 | 姻戚：母 ⁶⁶⁾ の兄弟 ※ | TRM II: 1768; THH: 291 |
| ヤズィード 3 世の治世 | | | | |
| 15 | 'Abd al-'Azīz b. 'Abd Allāh b. 'Amr b. 'Uṭmān | 126 年 | U (遠縁) 父祖が出身/※ | TRM II: 1870; THH: 294 |
| 16 | 'Abd al-'Azīz b. 'Umar b. 'Abd al-'Azīz | 126-129 年 | U：はとこ 父祖が出身/※ | TRM II: 1870; THH: 294 |
| マルワーン 2 世の治世 | | | | |
| 17 | 'Abd al-Wāḥid b. Sulaymān b. 'Abd al-Malik | 129-130 年 | U：従兄の子 父祖が出身/※ | TRM II: 1981; THH: 328 |
| 18 | 'Abd al-Malik b. Muḥammad b. 'Aṭīya al-Sa'dī | 130-131 年 ⁶⁷⁾ | ※ | TRM II: 2014; THH: 328 |
| 19 | Yūsuf b. 'Urwa b. Muḥammad b. 'Aṭīya al-Sa'dī | 132 年 | ※ | TRM III: 72; THH: 328 |

表 2 スフヤーン家統治時代のメディナ総督

| | 人名 | 在職期間 | 備考 | 典拠 |
|---------------|--|-------------------|---------------|---------------------------------------|
| ムアーウィヤ 1 世の治世 | | | | |
| 1 | Marwān b. al-Ḥakam b. Abī al-'Āṣ | 42-49, 54-57 年 | U：はとこ 出身 | TRM II: 16, 164; THH: 153-154, 169 |
| 2 | Sa'īd b. al-'Āṣ b. Sa'īd b. al-'Āṣ b. Umayya | 49-54 年 | U：はとこの子 出身 | TRM II: 86; THH: 157 |
| 3 | al-Walīd b. 'Utba b. Abī Sufyān | 57-60 年 | U：甥 出身 | TRM II: 180; THH: 170 |
| ヤズィード 1 世の治世 | | | | |
| 4 | 'Amr b. Sa'īd b. al-'Āṣ b. Sa'īd b. al-'Āṣ | 60-61 年 | U (遠縁) 出身 | TRM II: 222; THH: 178 |
| 3' | al-Walīd b. 'Utba b. Abī Sufyān | 61-62 年 | U：従兄弟 出身 | TRM II: 399; THH: 194-195 |

65) 前掲注 63 を参照のこと。

66) ワリード 2 世の母は Umm al-Ḥaḡḡāḡ bt. Muḥammad b. Yūsuf [NQ: 166-167; AA v. 9: 127; TRM II: 1810; TY v. 2: 396]。

67) TRM において、130 年に同年の巡礼を指揮した人物 (Muḥammad b. 'Abd al-Malik) がメッカやメディナの総督と記されているが [TRM II: 2017]、これはおそらく 'Abd al-Malik b. Muḥammad al-Sa'dī がイエメンへと遠征に向かった際にメッカの代理総督として残した、その息子の Muḥammad b. 'Abd al-Malik b. Muḥammad と混同しているのだと考えられる [注 74]。

| | | | | |
|---|----------------------------------|---------|---------------|-----------------------------|
| 5 | 'Uṭmān b. Muḥammad b. Abi Sufyān | 62-63 年 | U : 従兄弟 出身 | TRM II : 402 ; THH : 195 |
|---|----------------------------------|---------|---------------|-----------------------------|

表3 アッバース朝初期 (マフディーの治世まで) のメディナ総督

| | 人名 | 在職期間 | 備考 ⁶⁸⁾ | 典拠 |
|---|---|-----------|---------------------------|------------------------------|
| サッフアーフ (Abū al-'Abbās 'Abd Allāh b. Muḥammad b. 'Alī) の治世 | | | | |
| 1 | Dāwūd b. 'Alī b. 'Abd Allāh b. al-'Abbās | 132-133 年 | A : 叔父 父祖が出身 | TRM III : 72 ; THH : 334 |
| 2 | Ziyād b. 'Ubayd Allāh al-Hārītī | 133-141 年 | 姻戚 : 母 ⁶⁹⁾ の兄弟 | TRM III : 73 ; THH : 334 |
| マンスール (Abū Ġa'far b. Muḥammad b. 'Alī) の治世 | | | | |
| 3 | Muḥammad b. Ḥālīd b. 'Abd Allāh al-Qasrī | 141-144 年 | | TRM III : 137 ; THH : 348 |
| 4 | Riyāḥ b. 'Uṭmān b. Ḥayyān al-Murri | 144-145 年 | | TRM III : 143 ; THH : 348 |
| 5 | 'Abd Allāh b. al-Rabī' b. 'Ubayd Allāh al-Hārītī | 145-146 年 | | TRM III : 265 ; THH : 348 |
| 6 | Ġa'far b. Sulaymān b. 'Alī b. 'Abd Allāh b. al-'Abbās | 146-150 年 | A : 従兄弟 父祖が出身 | TRM III : 326 ; THH : 348 |
| 7 | al-Ḥasan b. Zayd b. al-Ḥasan b. 'Alī | 150-155 年 | (ハサン家) 出身 | TRM III : 358 ; THH : 353 |
| 8 | 'Abd al-Ṣamad b. 'Alī b. 'Abd Allāh b. al-'Abbās | 155-159 年 | A : 叔父 父祖が出身 | TRM III : 377 ; THH : 349 |
| マフディー (Muḥammad b. Abi Ġa'far) の治世 | | | | |
| 9 | Muḥammad b. 'Abd Allāh al-Kaṭīrī | 159 年 | 出身 | TRM III : 460 ; THH : 358 |
| 10 | 'Ubayd Allāh b. Muḥammad al-Ġumaḥī | 159-160 年 | 出身 | TRM III : 460 ; THH : 358 |
| 6' | Ġa'far b. Sulaymān b. 'Alī b. 'Abd Allāh b. al-'Abbās | 160-166 年 | A : 父の従兄弟 父祖が出身 | TRM III : 492 ; THH : 358 |
| 11 | Ibrāhīm b. Yaḥyā b. Muḥammad b. 'Alī b. 'Abd Allāh | 166-167 年 | A : 従兄弟 父祖が出身 | TRM III : 517 ; THH : 358 |
| 12 | Ishāq b. 'Īsā b. 'Alī b. 'Abd Allāh b. al-'Abbās | 167-169 年 | A : 父の従兄弟 父祖が出身 | TRM III : 520 ; THH : 358 |

表4 マルワーン家統治時代の巡礼の指揮官

| | 巡礼の年 | 指揮官の人名 | 備考 ⁷⁰⁾ | 典拠 |
|---|---------------|------------------------------|-------------------|---|
| 1 | 72-74 (3回) | al-Ḥaġġāġ b. Yūsuf al-Ṭaqafī | ●○ ⁷¹⁾ | TRM II : 834, 853, 862 ; THH : 232 ; TY v. 2 : 336 ; KM : 24 |
| 2 | 75 | アブド・アルマリク | カリフ | TRM II : 873 ; THH : 232 ; TY v. 2 : 336 ; KM : 24 |

68) 表中の A はアッバース家の成員であることを示す。

69) サッフアーフの母は Rayṭa bt. 'Ubayd Allāh b. 'Abd Allāh al-Hārītī [NQ : 30 ; TRM III : 88 ; TY v. 2 : 417-418]。

70) 表中の○はメディナ総督、●はメッカ総督であることを示す。△はメディナ総督の代理、▲はメッカ総督の代理であることを示す。以下表5-7も同様。

71) 72年はヒジャーズ遠征の司令官(シリア軍のみ)として、73年はメッカ総督として、74年はメディナ総督として巡礼を指揮した。

| | | | | |
|----|-----------------------------------|---|-----------------------------------|--|
| 3 | 76-77, 79-80, 82 (5回) | Abān b. 'Uṭmān b. 'Affān | ○ | TRM II : 940, 1031, 1039, 1046, 1085; THH : 232; TY v. 2 : 336; KM : 25 |
| 4 | 78, 91 (2回) | al-Walid b. 'Abd al-Malik (ワリード1世) | 78年は後継者候補兼 夏の遠征の司令官 91年はカリフ | TRM II : 1035, 1232-1234; THH : 232, 242; TY v. 2 : 340-341; KM : 26 |
| 5 | 81, 97 (2回) | Sulaymān b. 'Abd al-Malik (スライマーン) | 81年は後継者候補 97年はカリフ | TRM II : 1063, 1314; THH : 232, 248; TY v. 2 : 336, 360; KM : 25-26 |
| 6 | 83-86 (4回) | Hišām b. Ismā'īl al-Maḥzūmī | ○ | TRM II : 1127, 1132, 1171, 1182; THH : 232, 242; TY v. 2 : 336, 349; KM : 25 |
| 7 | 87-90, 92 (5回) | 'Umar b. 'Abd al-'Azīz ⁷²⁾ | ○ | TRM II : 1191, 1196, 1200, 1208, 1235; THH : 242; TY v. 2 : 349-350; KM : 25-26 |
| 8 | 93 | 'Abd al-'Azīz b. al-Walid b. 'Abd al-Malik | 後継者候補兼 夏の遠征の司令官 | TRM II : 1255; THH : 242; KM : 26 |
| 9 | 94 | Maslama b. 'Abd al-Malik | 夏の遠征の司令官 | TRM II : 1266; THH : 242; KM : 26 |
| 10 | 95 | Bišr b. al-Walid b. 'Abd al-Malik | 夏の遠征の司令官 | TRM II : 1269; THH : 242; KM : 26 |
| 11 | 96, 99-100 (3回) | Abū Bakr b. Muḥammad ibn Ḥazm | ○ | TRM II : 1305, 1346, 1358-1359; THH : 248, 253; TY v. 2 : 360, 370; KM : 26-28 |
| 12 | 98 | 'Abd al-'Azīz b. 'Abd Allāh b. Ḥālid | ● | TRM II : 1335; THH : 248; TY v. 2 : 360; KM : 26 |
| 13 | 101-103 (3回) | 'Abd al-Raḥmān b. al-Daḥḥāk b. Qays | ○ | TRM II : 1394, 1436-1437; THH : 262; TY v. 2 : 377; KM : 28 |
| 14 | 104 | 'Abd al-Wāḥid b. 'Abd Allāh al-Naṣrī | ○ | TRM II : 1461; THH : 262; TY v. 2 : 377; KM : 28 |
| 15 | 105, 107-112 (7回) | Ibrāhīm b. Hišām al-Maḥzūmī | ○ | TRM II : 1467, 1491, 1494, 1505, 1526, 1530, 1559; THH : 285; TY v. 2 : 394; KM : 29 |
| 16 | 106 | ヒシャーム | カリフ | TRM II : 1482; THH : 285; TY v. 2 : 394; KM : 29 |
| 17 | 113 | Sulaymān b. Hišām b. 'Abd al-Malik | 夏の遠征の司令官 | TRM II : 1560; THH : 285; TY v. 2 : 394; KM : 29 |
| 18 | 114, 117 (2回) | Ḥālid b. 'Abd al-Malik b. al-Ḥarīṭ | ○ | TRM II : 1562, 1586; THH : 285-286; TY v. 2 : 394; KM : 29 |
| 19 | 115, 118, 120-122, 124 (6回) | Muḥammad b. Hišām al-Maḥzūmī | ●○ ⁷³⁾ | TRM II : 1563, 1592, 1666, 1698, 1717, 1727; THH : 285-286; TY v. 2 : 394; KM : 30 |
| 20 | 116 | al-Walid b. Yazid b. 'Abd al-Malik | ワリー・アルアフド | TRM II : 1572; THH : 285; TY v. 2 : 394; KM : 29 |
| 21 | 119 | Maslama b. Hišām b. 'Abd al-Malik | 後継者候補兼 夏の遠征の司令官 | TRM II : 1635; THH : 286; TY v. 2 : 394 |

72) 88年の巡礼指揮官については、'Umar b. 'Abd al-'Azīz とする説 [TRM II : 1196; TY v. 2 : 349; KM : 25] のほかに、'Umar b. al-Walid b. 'Abd al-Malik とする説が見られる [TRM II : 1197; THH : 234, 242; KM : 25-26]。'Umar b. al-Walid は当時ヨルダン総督であった [注45]。

73) 115年はメッカ総督として、118年以降はメディナ総督として巡礼を指揮した。

| | | | | |
|----|-----------------|---|---|---|
| 22 | 123 | Yazid b. Hišām b. 'Abd al-Malik | | TRM II : 1725 ; THH : 286 ; TY v. 2 : 394 |
| 23 | 125 | Yūsuf b. Muḥammad al-Ṭaqafī | ○ | TRM II : 1769 ; THH : 292 ; KM : 31 |
| 24 | 126-128 (3回) | 'Abd al-'Azīz b. 'Umar | ○ | TRM II : 1875, 1917, 1942 ; THH : 329 ; TY v. 2 : 417 ; KM : 32 |
| 25 | 129 | 'Abd al-Wāḥid b. Sulaymān | ○ | TRM II : 1983 ; THH : 329 ; TY v. 2 : 417 ; KM : 33 |
| 26 | 130 | Muḥammad b. 'Abd al-Malik al-Sa'dī ⁷⁴⁾ | ▲ | THH : 317 ; AA v. 9 : 304 |
| 27 | 131 | al-Walid b. 'Urwa b. Muḥammad al-Sa'dī ⁷⁵⁾ | △ | TRM III : 11 ; THH : 329 ; KM : 33 |

表5 正統カリフ時代までの巡礼の指揮官

| | 年 | 指揮官の人名 | 備考 | 典拠 |
|---|-------------------------------|--|---------|--|
| 1 | 8, 11 (2回) | 'Attāb b. Asīd b. Abī al-'Īṣ b. Umayya | ● | TRM I : 1685, 2015 ; THH : 56, 77 ; TY v. 2 : 82 ; KM : 11-12 |
| 2 | 9, 12 (2回) | Abū Bakr al-Šiddīq (アブー・バクル) | 12年はカリフ | TRM I : 1720, 2077-2078 ; THH : 57, 79 ; TY v. 2 : 82, 156 ; KM : 12-13 |
| 3 | 10 | ムハンマド | 預言者 | TRM I : 1751-1756 ; THH : 58 ; TY v. 2 : 121-125 ; KM : 12 |
| 4 | 13, 24 (2回) | 'Abd al-Raḥmān b. 'Awf al-Zuhri | | TRM I : 2212, 2809 ; THH : 84, 113 ; TY v. 2 : 183, 205 ; KM : 13, 15 |
| 5 | 14-23 (10回) | ウマル1世 | カリフ | TRM I : 2388, 2425, 2480, 2569, 2578-2579, 2595, 2646, 2693, 2721 ; THH : 88 ; TY v. 2 : 183 ; KM : 14 |
| 6 | 25-34 ⁷⁶⁾ (10回) | ウスマーン | カリフ | TRM I : 2810-2811, 2819, 2828, 2833, 2864, 2888, 2926, 2941 ; THH : 114-115 ; TY v. 2 : 205 ; KM : 15-16 |
| 7 | 35 | 'Abd Allāh b. al-'Abbās | | TRM I : 3045 ; THH : 133 ; TY v. 2 : 205 ; KM 17 |

74) この年の巡礼指揮官に関する記事は混乱が生じている。メディナ総督である、表1:18の'Abd al-Malik b. Muḥammad al-Sa'dīとする説 [THH:329] のほかに、マルワーン家の Muḥammad b. 'Abd al-Malik とする説 [TRM II:2017], 表1:18の息子の Muḥammad b. 'Abd al-Malik al-Sa'dī とする説 [THH:317; AA v.9:304] が見られる。これらの史料のうち、'Abd al-Malik b. Muḥammad al-Sa'dī のヒジャーズ地方、イエメン遠征について最も詳細な記録を残している AA の記述によれば、2度目のイエメン遠征を命じられた'Abd al-Malik b. Muḥammad が、息子の Muḥammad b. 'Abd al-Malik をメッカ総督代理として残し、130年の巡礼の指揮を命じた。ほかの史料と異なり、巡礼の指揮官の任命に至るまでの文脈の説明もなされていることを信頼し、Muḥammad b. 'Abd al-Malik al-Sa'dī 説を採用する。なお、TY v.2:417; KM:33 では Muḥammad b. 'Abd al-Malik b. 'Aṭīya となっており、'Aṭīya の前に入る Muḥammad が脱落しているのだとすれば、これらも表1:18の息子 Muḥammad b. 'Abd al-Malik b. Muḥammad b. 'Aṭīya を指しているのだと考えられる。

75) 表1:18の'Abd al-Malik al-Sa'dī の甥であり、彼がイエメン遠征をしていた期間のメディナの総督代理である [TRM III:11; THH:328]。

76) TRM には、32年の巡礼の記事が見られない [TRM I:2888-2906]。

| アリーの治世 (第1次内乱期) | | | | |
|-----------------|----|------------------------------|--------|--|
| 7 | 36 | 'Abd Allāh b. al-'Abbās | バスラ総督 | TRM I: 3273; THH: 143-144; TY v. 2: 254; KM: 17 |
| 8 | 37 | 'Ubayd Allāh b. al-'Abbās | イエメン総督 | TRM I: 3390; THH: 143; TY v. 2: 254 |
| 9 | 38 | Qūṭam b. al-'Abbās | ● | TRM I: 3443; THH: 149; TY v. 2: 254; KM: 17 |
| 10 | 39 | Šayba b. 'Uṭmān b. Abī Ṭalḥa | | TRM I: 3448; THH: 149-150; TY v. 2: 254; KM: 17 |

表6 スフヤーン家統治時代の巡礼の指揮官

| 巡礼の年 | 指揮官の人名 | 備考 | 典拠 |
|---|----------------------------------|------------------|---|
| 1 41-42 ⁷⁷⁾ (2回) | 'Utba b. Abī Sufyān | ● ⁷⁸⁾ | TMD v. 38: 266; 注77 |
| 2 43, 45, 48, 54-55 (5回) | Marwān b. al-Ḥakam | ○ | TRM II: 67, 81, 85, 170, 172; THH: 155-156, 169; TY v. 2: 284; KM: 20 |
| 3 44, 50 (2回) | ムアーウィヤ1世 | カリフ | TRM II: 70; THH: 155, 159, 165; TY v. 2: 284; KM: 20 |
| 4 46-47 (2回) | 'Anbasa b. Abī Sufyān | ● ⁷⁹⁾ | TMD v. 47: 21; 注77 |
| 5 49, 52-53 (3回) | Sa'īd b. al-'Āṣ | ○ | TRM II: 87, 157, 163; THH: 157-158, 165, 168; TY v. 2: 284; KM: 20 |
| 6 51 | Yazīd b. Mu'āwiya b. Abī Sufyān | ワリー・アルアフド | TRM II: 156; TY v. 2: 284; KM: 20 |
| 7 56-58, 61-62 ⁸⁰⁾ (5回) | al-Walid b. 'Utba b. Abī Sufyān | ○ | TRM II: 173, 188, 399, 405; THH: 170, 195; TY v. 2: 284-285, 302; KM: 20-21 |
| 8 59 | 'Uṭmān b. Muḥammad b. Abī Sufyān | | TRM II: 165; THH: 172; TY v. 2: 285; KM: 21 |
| 9 60 | 'Amr b. Sa'īd b. al-'Āṣ | ○ | TRM II: 295; THH: 194; TY v. 2: 302; KM: 21 |

77) TRM II: 16, 84-85; KM: 20 によれば, 'Utba b. Abī Sufyān が巡礼を指揮したのは41年, 46年, 47年の3回である。しかし, エジプトの地方史である WQ によれば, 'Utba は44年に死亡しており [WQ: 36], TMD に引用されているエジプトの al-Layṭ b. Sa'd (彼も 'Utba の死亡年を44年としている [TMD v. 38: 272]) からの情報では, 'Utba による巡礼の指揮は41と42年であり [TMD v. 38: 266], 46年と47年の巡礼は表6: 4の 'Anbasa b. Abī Sufyān が指揮している [TMD v. 47: 21]。なお, 'Anbasa は当時メッカ総督であったと推測され (彼のメッカ総督任命を伝える AA v. 4/1: 159 には, 前任者からの引継ぎの年月は記載されていないが, 彼が48年に死亡するまで, メッカ総督を務めていたことが記されている), 彼がこの2年の巡礼の指揮を務めた可能性は高い。'Utba と 'Anbasa の巡礼の指揮を務めた年に関する情報は, TRM, THH, TY の間でも一致しておらず (TY v. 2: 284 は41-42, 46-47の4年全てを 'Utba による巡礼とし, THH: 154, 157 は41年と46年を 'Utba, 42年と47年を 'Anbasa による巡礼としている), 恐らく両者の綴りが似ているために混乱が生じたのであろう。

78) ムアーウィヤ1世は第1次内乱平定後, 'Utba b. Abī Sufyān をメッカ総督に任命し, その後43年にエジプト総督に任命している [AA v. 4/1: 5, 159; WQ: 35]。

79) 前掲注77を参照のこと。

80) TRM には, 57年の巡礼の記事が見られない [TRM II: 180]。

表7 アッバース朝初期（マフディーの治世まで）の巡礼の指揮官

| 巡礼の年 | 指揮官の人名 | 備考 | 典拠 |
|---|--|--------------------------|--|
| 1 132 | Dāwūd b. 'Alī b. 'Abd Allāh b. al-'Abbās | ○ | TRM III : 72 ; THH : 335 ; TY v. 2 : 434 |
| 2 133 | Ziyād b. 'Ubayd Allāh al-Ḥārītī (姻戚 ⁸²⁾) | ○ | TRM III : 75 ; THH : 335 ; TY v. 2 : 435 ; KM : 34 |
| 3 134, 143 (2回) | 'Īsā b. Mūsā b. Muḥammad b. 'Alī b. 'Abd Allāh | 134年はクーフア総督 | TRM III : 81, 142 ; THH : 335, 339 ; TY v. 2 : 435, 469 ; KM : 34-35 |
| 4 135 | Sulaymān b. 'Alī b. 'Abd Allāh b. al-'Abbās | バスラ総督 | TRM III : 84 ; THH : 335 ; TY v. 2 : 435 ; KM : 34 |
| 5 136, 140, 144, 147, 152 (5回) | マンスール | カリフ | TRM III : 91, 128-129, 143, 353, 369 ; THH : 335, 338, 340, 343-344 ; TY v. 2 : 469 ; KM : 34-35 |
| 6 137, 142 (2回) | Ismā'īl b. 'Alī b. 'Abd Allāh b. al-'Abbās | モスル総督 | TRM III : 121, 141 ; THH : 337, 339 ; TY v. 2 : 469 ; KM : 34-35 |
| 7 138 | al-Faḍl b. Šāliḥ b. 'Alī b. 'Abd Allāh | | TRM III : 124 ; THH : 337 ; TY v. 2 : 469 ; KM : 34 |
| 8 139, 156 (2回) | al-'Abbās b. Muḥammad b. 'Alī b. 'Abd Allāh | | TRM III : 127, 378 ; THH : 337, 346 ; TY v. 2 : 469-470 ; KM : 35-36 |
| 9 141 | Šāliḥ b. 'Alī b. 'Abd Allāh b. al-'Abbās | ダマスカス他の総督 | TRM III : 138 ; THH : 339 ; TY v. 2 : 469 ; KM : 35 |
| 10 145 | al-Sarī b. 'Abd Allāh b. al-Ḥārītī b. al-'Abbās | ● | TRM III : 318 ; THH : 342 ; TY v. 2 : 469 ; KM : 35 |
| 11 146 | 'Abd al-Wahhāb b. Ibrāhīm b. Muḥammad b. 'Alī | | TRM III : 328 ; THH : 343 ; TY v. 2 : 469 ; KM : 35 |
| 12 148 | Ġa'far b. Abī Ġa'far al-Manšūr | | TRM III : 353 ; THH : 343 ; TY v. 2 : 469 ; KM : 35 |
| 13 149, 151, 154 (3回) | Muḥammad b. Ibrāhīm b. Muḥammad b. 'Alī | ● | TRM III : 354, 368, 373 ; THH : 344, 356-357 ; TY v. 2 : 469-470, 485 ; KM : 35 |
| 14 150, 155 ⁸²⁾ (2回) | 'Abd al-Šamad b. 'Alī b. 'Abd Allāh b. al-'Abbās | ○ ⁸³⁾ | TRM III : 359 ; THH : 344 ; TY v. 2 : 469-470 ; KM : 35 |
| 15 153, 160 (2回) | Muḥammad al-Mahdi (マフディー) | 153年はワリー・アルアフド, 160年はカリフ | TRM III : 371, 482 ; THH : 345, 348 ; TY v. 2 : 470, 485 ; KM : 35-36 |
| 16 157-158, 166-167 ⁸⁴⁾ (4回) | Ibrāhīm b. Yaḥyā b. Muḥammad b. 'Alī | ●○ ⁸⁵⁾ | TRM III : 380, 391, 518, 520 ; THH : 346-347, 356 ; TY v. 2 : 470, 485 ; KM : 36 |

81) 表3:2の人物。前掲注69を参照のこと。

82) TRM および THH において、155年の巡礼の記事が見られない [TRM III : 373-377 ; THH : 346]。

83) メディナ総督として巡礼を指揮したのは、155年のみ [表3:8]。

84) 166年の巡礼指揮官については、TRMを除くTHH, TY, KMが表7:13のMuḥammad b. Ibrāhīm b. Muḥammad b. 'Alīとしている [THH : 356 ; TY v. 2 : 485 ; KM : 37]。

85) メディナ総督として巡礼を指揮したのは166年と167年の2回 [表3:11]。167年の巡礼を執り行った直後に死亡した [TRM III : 520]。

| | | | | |
|----|------------------|--|-----------|---|
| 17 | 159 | Yazīd b. Maṣṣūr al-Ḥimyārī (姻戚 ⁸⁶⁾) | イエメン総督 | TRM II : 469 ; THH : 348 ; TY v. 2 : 485 ; KM : 36 |
| 18 | 161 | Mūsā (al-Hādī) b. Muḥammad al-Mahdī | ワリー・アルアフド | TRM II : 492 ; THH : 355 ; TY v. 2 : 485 ; KM : 37 |
| 19 | 162 | Ibrāhīm b. Ġa'far b. Abī Ġa'far al-Manṣūr | | TRM II : 493 ; THH : 355 ; TY v. 2 : 485 ; KM : 37 |
| 20 | 163, 168 (2回) | 'Alī b. Muḥammad al-Mahdī | | TRM II : 501, 522 ; THH : 356- 357 ; TY v. 2 : 485 ; KM : 37 |
| 21 | 164-165 (2回) | Šāliḥ b. Abī Ġa'far al-Manṣūr | | TRM II : 502-503, 505 ; THH : 356 ; TY v. 2 : 485 ; KM : 37 |

参考文献

- AA : Aḥmad b. Yahyā al-Balāḍurī, *Ansāb al-Ašraf*, vol. 4/1, ed. Iḥsān 'Abbās, Wiesbaden/Bayrūt, 1979 ; vol. 4/2, ed. 'Abd al-'Azīz al-Dūrī/'Išām 'Uqla, Wiesbaden/Bayrūt, 2001 ; vol. 5, ed. S. D. F. Goitein, Jerusalem, 1936 ; vol. 8-9, eds. Suhayl Zakkār/Riyāḍ Zarkalī, Bayrūt, 1996.
- KM : Muḥammad b. Ḥabīb, *Kitāb al-Muḥabbar*, ed. I. Lichtenstädter, Bayrūt, n. d. (rep ed.).
- KT : Ḥalīfa b. Ḥayyāt al-'Uṣfurī, *Kitāb al-Ṭabaqāt*, ed. Akram Ḍiyā' al-'Umarī, Baġdād, 1967.
- NQ : al-Muṣ'ab b. 'Abd Allāh al-Zubayrī, *Nasab Qurayš*, ed. E. Lévi-Provençal, al-Qāhira, 1982 (rep ed.).
- THH : Ḥalīfa b. Ḥayyāt al-'Uṣfurī, *Ta'riḥ Ḥalīfa b. Ḥayyāt*, ed. Suhayl Zakkār, Bayrūt, 1993.
- TK : Muḥammad b. Sa'd, *al-Ṭabaqāt al-Kubrā'*, 9 vols. ed. E. Sachau, Leiden, 1904-1940.
- TMD : 'Alī b. al-Ḥasan ibn 'Asākir, *Ta'riḥ Madīnat Dimašq*, 80 vols. ed. 'Umar b. Ġamāra al-'Amrāwī/'Alī Širī, Bayrūt, 1995-2001.
- TRM : Muḥammad b. Ġarīr al-Ṭabarī, *Ta'riḥ al-Rusul wa-al-Mulūk*, ed. M. J. de Goeje, 3 sers., Leiden, 1879-1901.
- TY : Aḥmad b. Abī Ya'qūb al-Ya'qūbī, *Ta'riḥ al-Ya'qūbī*, ed. M. T. Houtsma, 2 vols., Leiden, 1883.
- WQ : Muḥammad b. Yūsuf al-Kindī, *Kitāb al-Wulāt wa-Kitāb al-Quḍāt*, ed. R. Guest, Leiden/London, 1912.
- Abbott, N. (1938) *The Qurrah papyrus from Aphrodito in the Oriental Institute*. Chicago.
- Abbott, N. (1965) A new papyrus and a review of the administration of 'Ubayd Allāh b. al-Ḥabḥāb. In: Makdisi, G. (ed.) *Arabic and Islamic studies in honor of Hamilton A.R. Gibb*. Leiden, 21-35.
- Bell, H. I. (1928) The administration of Egypt under the Umayyad Khalīfs. *Byzantinische Zeitschrift* 28, 278-286.
- Bonner, M. (2006) *Jihad in Islamic history : doctrines and practice*. Princeton/Oxford.
- Borrut, A./Cobb, P. M. (2010) Introduction : toward a history of Umayyad legacies. In: Borrut, A.

86) 姉妹の Arwā bt. Maṣṣūr がマフデイーの母である [TRM III : 442 ; TY v. 2 : 417-418]。

- /Cobb, P. M. (eds.) *Umayyad legacies : medieval memories from Syria to Spain*. Leiden, 1-22.
- Blankinship, K. Y. (1994) *The end of the jihād state : the reign of Hishām ibn 'Abd al-Malik and the collapse of the Umayyads*. Albany.
- Cameron, A./Conrad, L. I. (1992) Introduction. In : Cameron, A./Conrad, L. I. (eds.) *The Byzantine and Early Islamic Near East I : problems in the literary source material*. Princeton, 1-24.
- Caskel, W. (1966) *Ġamharat an-nasab : das genealogische Werk des Hišām ibn Muḥammad al-Kalbī*. 2 vols., Leiden.
- Crone, P. (1980) *Slaves on horses : the evolution of Islamic polity*. Cambridge/New York.
- Crone, P. (2004) *God's rule : government and Islam*. New York.
- Crone, P./Cook, M. (1977) *Hagarism : the making of the Islamic world*. Cambridge.
- Crone, P./Hinds, M. (1986) *God's caliph : religious authority in the first centuries of Islam*. Cambridge.
- Dixon, A. A. A. (1971) *The Umayyad caliphate 65-86/684-705 : a political study*. London.
- Donner, F. M. (1986) The formation of the Islamic state. *JAOS* 106 (2), 283-296.
- Donner, F. M. (1998) *Narratives of Islamic origins : the beginnings of Islamic historical writing*. Princeton.
- Donner, F. M. (2010a) *Muhammad and believers : at the origins of Islam*. Cambridge, Mass./ London.
- Donner, F. M. (2010b) Umayyad efforts at legitimation : the Umayyads' silent heritage. In : Borrut, A. /Cobb, P. M. (eds.) *Umayyad legacies : medieval memories from Syria to Spain*. Leiden, 187-211.
- 藤本勝次ほか (訳) (2002) 『コーラン』全2巻. 中央公論新社.
- 後藤 明 (1988) ウマイヤ朝カリフ・マルワーンとマワーリー 『榎博士頌寿記念東洋史論叢』汲古書院, 165-184.
- Hawting, G. R. (2000) *The first dynasty of Islam : the Umayyad caliphate : AD 661-750*, 2nd ed. London/New York.
- Hitti, P. K. (1970) *History of the Arabs from the earliest times to the present*, 10th ed. London.
- Hoyland, R. G. (1997) *Seeing Islam as others saw it : a survey and evaluation of Christian, Jewish and Zoroastrian writings on Early Islam*. Princeton.
- Humphreys, R. S. (1991) *Islamic history : a framework for inquiry*. Princeton.
- Humphreys, R. S. (2006) *Mu'awiya ibn Abi Sufyan : from Arabia to empire*. Oxford.
- 稲葉 稯 (1995) アラブ・ムスリムの東方進出 堀川徹 (編) 『世界に広がるイスラーム』栄光教育文化研究所, 81-124.
- Judd, S. C. (1997) *The third fitna : orthodoxy, heresy and coercion in late Umayyad history*. Ph. D. Diss., University of Michigan.
- Judd, S. C. (2008) Reinterpreting al-Walīd b. Yazīd. *JAOS* 128 (3), 439-458.
- 亀谷 学 (2008) ウマイヤ朝期におけるカリフの称号 —— 銘文・碑文・パピルス文書からの再検討 —— 『日本中東学会年報』24 (1), 17-41.
- Kennedy, H. (2001) *The armies of the caliphs : military and society in the early Islamic state*.

- London/New York.
- Kennedy, H. (2004) *The prophet and the age of the caliphates : the Islamic Near East from the sixth to the eleventh century*, 2nd ed. Harlow, England.
- 菊地達也 (2009) 『イスラーム教「異端」と「正統」の思想史』講談社.
- Kister, M. J. (1977) The battle of the Ḥarra: some socio-economic aspects. In: Rosen-Ayalon, M. (ed.) *Studies in memory of Gaston Wiet*. Jerusalem, 33-49.
- 高野太輔 (1996) ウマイヤ朝期イラク地方における軍事体制の形成と変容 —— シリア軍の東方進出問題をめぐって —— 『史学雑誌』105 (3), 1-25.
- 高野太輔 (2008) 『アラブ系譜体系の誕生と発展』山川出版社.
- Lammens, H. (1921) *Le califat de Yazid I^{er}*. Beyrouth.
- Landau-Tasserion, E. (2010) Arabia. In: Robinson, C. F. (ed.) *The new Cambridge history of Islam I*. Cambridge/Tokyo, 397-447.
- Lassner, J. (1980) *The shaping of 'Abbāsīd rule*. Princeton.
- 松本隆志 (2009) 『歴史』と『征服』におけるイブン・アルアシュアスの反乱 —— ウマイヤ朝史料研究の一試論 —— 『オリエント』52 (2), 125-142.
- 森本公誠 (1975) 『初期イスラム時代エジプト税制史の研究』岩波書店.
- 森本公誠 (1976) エジプトにおけるアラブ受給者登録簿としてのディーワーン『オリエント』19 (2), 85-110.
- 森本公誠 (1984) アラブ (前期) 島田虔次ほか (編) 『アジア歴史研究入門 4 内陸アジア・西アジア』同朋社, 529-554.
- Noth, A. (Conrad, L. I. (coll.), Bonner, M. (tr.)) (1994) *The early Arabic historical tradition : a source-critical study*, 2nd ed. Princeton.
- Robinson, C. F. (2005) *'Abd al-Malik*. Oxford.
- Rotter, G. (1982) *Die Umayyaden und der Zweite Bürgerkrieg (680-692)*. Wiesbaden.
- Sezgin, F. (1967) *Geschichte des arabischen Schrifttums I*. Leiden.
- Shaban, M. A. (1971) *Islamic history : a new interpretation : A.D. 600-750 (A.H. 132)*. Cambridge.
- 嶋田襄平 (1977) 『イスラムの国家と社会』岩波書店.
- Stone, L. (1971) Prosopography. *Dædalus* 100 (1), 46-79.
- 高橋 秀 (1990) 古代ローマ史プロソポグラフィ研究『史苑』50 (1), 127-148.
- Wansbrough, J. (1977) *Quranic studies : sources and methods of scriptural interpretation*. Oxford.
- Wansbrough, J. (1978) *The sectarian milieu : content and composition of Islamic salvation history*. Oxford/New York.
- Wellhausen, J. (1902) *Das arabische Reich und sein Sturz*. Berlin.
- 横内吾郎 (2005) ウマイヤ朝におけるエジプト総督人事とカリフへの集権『史林』88 (4), 100-127.

系図 ウマイヤ家一族
(下線はカリフとなった人物)

